

受 驗 應 用

新 編  
世 界 歷 史 問 答

精 華 堂 發 兌

049586-000-9

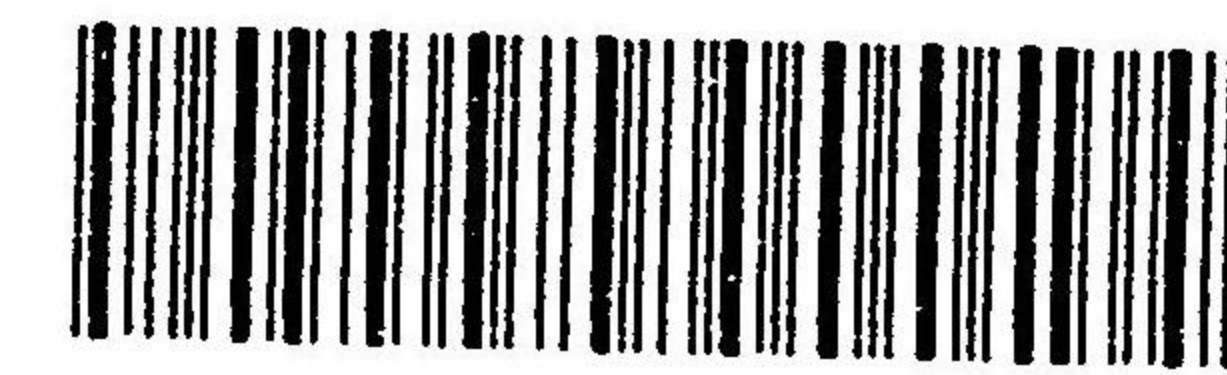
特61-119

新編世界歷史問答(受驗應用)

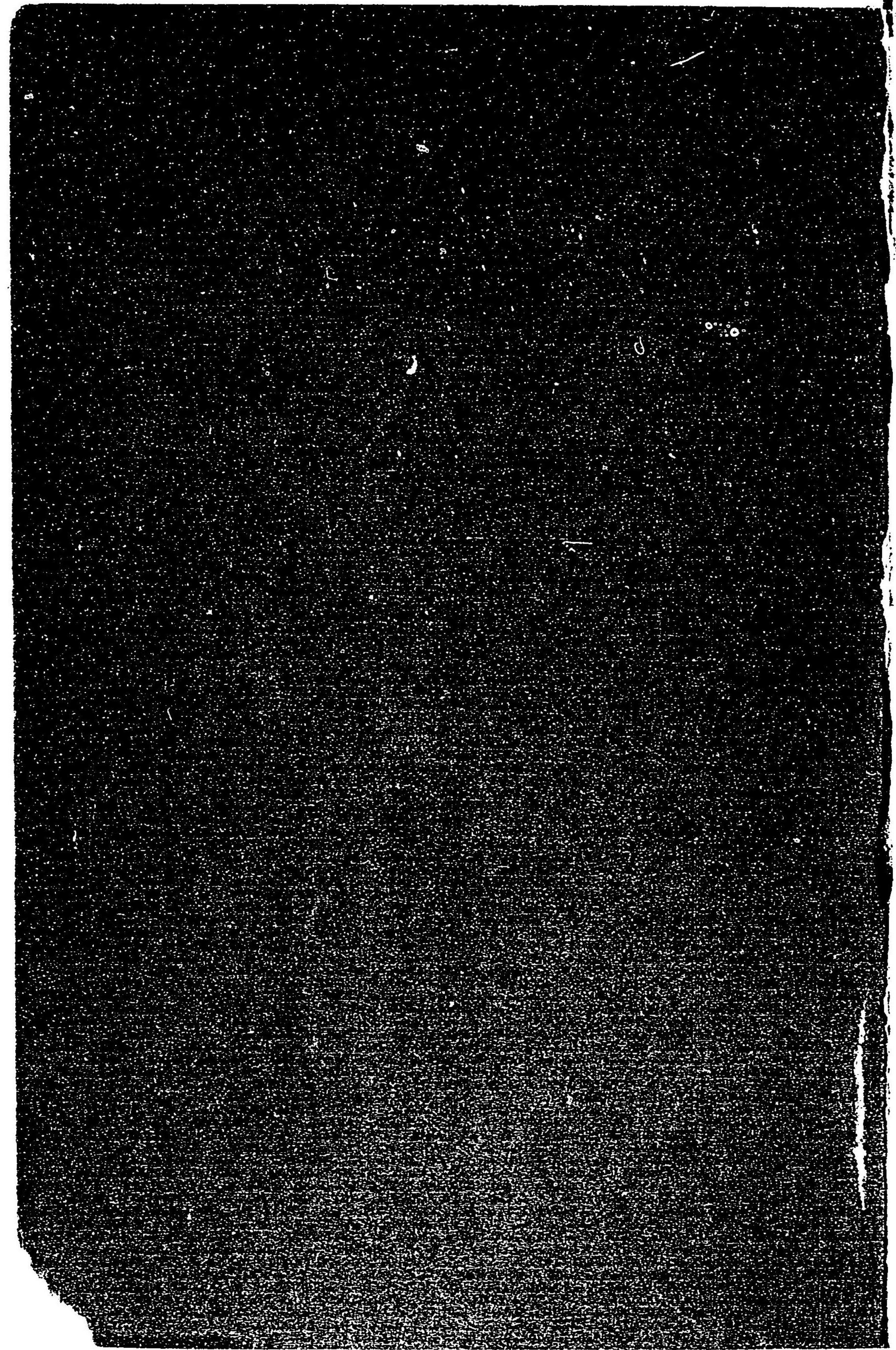
又間精華堂

M34

BEM-0285









# 新編世界歴史問答

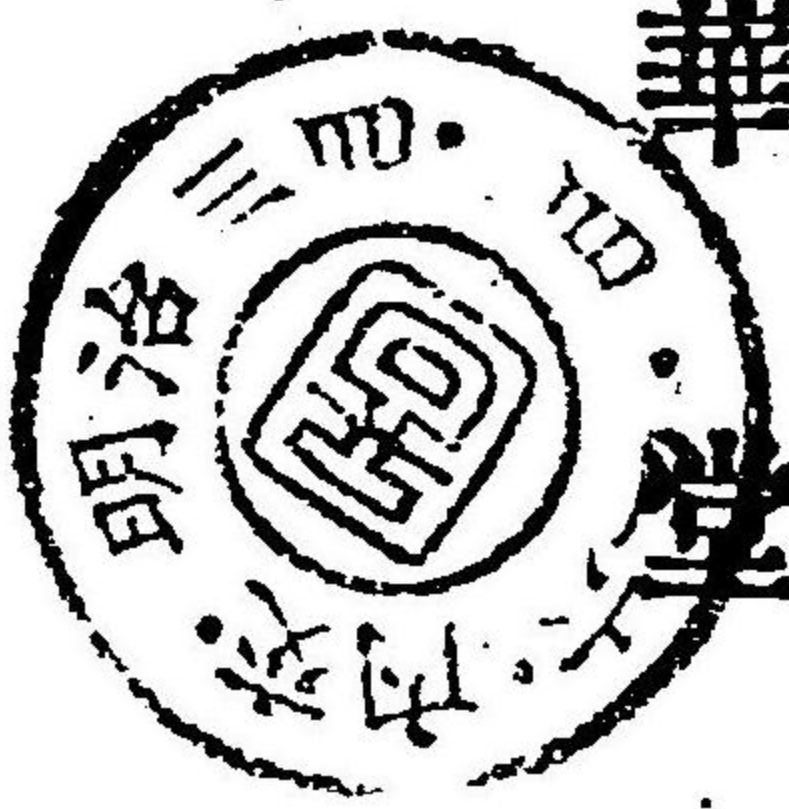


問題第一 世界史とは如何

世界史とは直接或は間接とを論せず人間社會の狀態に影響したる過去の事實又は之を變化せしめたる過去の事實等を網羅して叙次したる者をいふ詳く之をいへば人間の單獨的生活の行爲と思想とが變じて社會的生活の思想と行爲となりたる種々雜多の事實が相寄り相伴うて國家の興亡盛衰に及ぼせる現象を記述したる者なり

問題第二 世界史を東西に分つて編述する所以を問ふ

精 華 學 編





泰西の史家が世界史を論ずるに東洋を度外に置きたるは謬見の甚しき者なり東洋には西洋の文明の波及せざる以前より夙に特種の文明發達して西洋の歴史時代に後れずして社會的國民の生活をなし純粹なる歴史を有する事は疑ふべからざる事實なり故に東西の文明は二大源流をなし相混成したる者にあらざれば一世界史となして叙次するは其富を得たる者にあらず是非共之を東西兩洋に分ちて叙述せざるべからず是れ自然の勢なり

**問題第三** 西洋史に於ける社會發達の由來を問ふ

暖和なる氣候と膏腴なる土地と平坦なる地勢と便利なる水路とは實に人間社會をして發達せしめたる最大なる要素なり今西洋史に於ける社會發達の起原地を叙せんに西方ナイル河畔より東方チクリス河畔に到るまでの廣袤十六度に達したる平原は氣候温和地味膏沃水路便利人間

社會を組織するに於ては實に萬全なる地方なり故に埃及國民の社會はナイル河畔に發達し巴比崙尼亞西述兩國民の社會はユーフレッツ河とチクリス河との間に於て發達せり之を西洋史に於ける人間社會發達せる本源地となす此等諸國の文明は或事實の爲に防げられ其進歩を遂ぐる能はざりしとは雖ども其文化は希臘に波及して希臘人の文明を開き羅馬人は又之を希臘人より傳受して獨り自國の文明を作りたるのみに止まらず之を歐洲全部に播し延いて遠く亞米利加に波及し歐亞兩大陸に於ける今日の文明を産出するに至れり

**問題第四** 高加索人種を幾派に分つか且つ各派に於ける人文の異なる点を記せ

高加索人種即ち白哲人種を分ちて三大派となす第一はアリアン派にして波斯人印度人及び歐洲人之に屬す第二はセミチック派にして亞述人



猶太人腓尼西亞人及び亞刺人等之に屬し第三はハミチック派にして埃及人加爾底亞人之に屬す此分類は全く原語の異なる点よりして立ちたる者なれども文明の状態に至りても各特長ありアリアン人は道德智識兩ながら他の二派を凌駕し其健強なる腦髓と其活潑なる行爲とは實に現今に於ける世界の文明を大成するに至れり

**問題第五** アリアン人種の原住地及び歐洲に入りたる年代を問ふ

アリアン人は太古波斯の東北パクトリアの近傍に住し夙に野蠻の域を脱して厚生利用の道を立てたりしが歴史時代の前に在つて分れて二となり其一群は西にして歐洲に移轉し其一隊は波斯印度に入り國を建てたりといふ

**問題第六** 西洋史を分ちて何大時期に分つか

上世史中世史近世史最近世史の四大時期に分つ上世史は太古より西羅

馬帝國滅亡の時に至る(紀元四百六十七年まで)即ち諸國が羅馬帝國の影響を被りたる時期  
中世史は西羅馬帝國滅亡より宗教改革に至る(紀元四百六十七年より千五百十七年まで)即ちチュートン人が社會を統御するに至りし時期、近世史は宗教改革より佛蘭西大革命の終に至る(紀元千五百十七年より千八百十五年まで)即ち歐洲社會膨張して亞米利加に影響を及ぼせし時期、最近世史は佛蘭西大革命より今日に至る(紀元千八百十五年以降)即ち歐洲社會の影響が廣く世界上に至りし時期

### 第一篇 上世史

#### 第一章 埃及史

**問題第一** 埃及國文化の發達したる所以を問ふ



古代諸國中文明の進歩速かにして且つ其歴史の最も古きものは埃及に若くものなし蓋し年々六七月の頃よりナイルの河水溢れて兩岸を蔽ひ水退く時は其跡一面に粘土を貽ふを以て土地肥沃にして五穀豊熟し一人の小兒を丁年まで養育するに僅に四弗にて足れりと云ふこれ此國の人口速に繁殖し文明の進歩亦著しかりし所以なり

問題第二 埃及史の概略を記せよ

埃及の建國は歴史家各説を異にすと雖ども紀元前二千七百年を以て稍や信に近しとす爾來屢正朔を變へ第四朝に至りて國勢大に振ふ尖塔の建築も此時代にありしと云ふ然れども後久しからずして王權衰へ群雄四方に割據して國中大に亂る此際に乘じヒクソンと稱する野蠻人亞刺比亞より侵入し遂に全國を并吞せり之より争亂愈絶せず千五百二十七年國民奮起してヒクソンを逐ひ獨立を回復せり此時より二三百年間を

埃及最盛の時代とす内に在りては技藝大に進歩し外に在りては武威四隣に輝きたり然れども人民治に狎れて元氣を失ひ國勢再び衰へ終に紀元前五百二十五年波斯王カムビセスのために亡ぼさる後又アレキサンデルの版圖に入り王死するに及び其將トレミイ之を領し子孫相傳へて紀元前三十年女王クレオパトラの世に至り此世界の最古國も遂に羅馬の郡縣となれり

問題第三 埃及の政事及び宗教は如何併せて其政体を生じたる原由を述べよ

埃及の政体は君主專制にして國王は神聖にして犯すべからざる者となせり如斯君民の間に於て嚴酷なる等差を生じたるは一に土地の狀況が然らしめたる者なり抑も埃及國內を貫流せるナイル河は年々洪水ありて其氾濫したる後は河畔一面泥土を以て滿され五穀は耕作を須たすし



て収獲するを得るの一大天幸ありと雖ども之がために土地の境界判然せざるを以て水退くの後其境界を指定するには神聖なる國王の威力に依らざるべからず其他國家の工事外敵に對する守備兵の如きも勿論國王の力を借らざるべからざるを以て彼の一大原因と此等の小原因を以て國王は最上無限なる地位を有し國民は王を尊びてフツラオ即ち太陽神の子として神視するに至れり埃及の宗教は無形全能なる唯一神の存することを唱ふると雖ども僧侶等は此全能なる唯一神が數多の附屬せる神を作りたるとせるの弊遂には天地山川禽獸を以て神となし尊敬するに至れり故に埃及の宗教は其始は他の一神教にも劣らざる高尚なる宗教を有せしも後には盲昧野蠻なる多神教に變ずるに至れり

**問題第四**

埃及人の族制及び文化の發達せざりし原因を問ふ  
埃及國民は古昔より僧侶武士平民の三階級に分かたる其内僧侶は勢力

最も大にして宗教上の事は勿論法律醫術數學等を修む武士は専ら武術を講し戰鬥の事に従ひ平民は農工商等にして一切の政權を有する能はず此等の階級は子々孫々決して變すべからざる者となりて其弊や如何に才能ありと雖ども上級に進む能はず故に國民の競争心は自ら減じて遂に埃及國衰廢の最大原因をなすに至れり

**問題第五**

埃及人の文化を問ふ殊に長じたる技術は如何

政事宗教の概略は既に記したり其他の文化に就きて之を略叙するに蓋し埃及人は天然力を崇拜し其工藝技術の如きも宏壯偉大を極めたり方今現在せる尖塔中(尖塔は神に獻じたる者なりと傳ふ)最大なる者は高さ四百八十呎底邊七百六十四呎に達し其一石の重さは千六百噸に過ぐる者あり其他金字塔(古昔國王の墳墓なりと傳ふ)螺旋室の如きを見れば埃及人が如何に建築術に長じたるかを知らんに足らん文學も稍や進歩し



天文幾何學醫學等にも通じ今日には跡を絶ち用ゐられずと雖どもヒエ  
ログリフィックと稱する形象文字を使用せり其他木乃伊<sup>ミイラ</sup>と唱ふる屍体  
防腐法を知り太陽曆を發見する等實に大古蒙昧の世にあつては文化發  
達の著しきこと實に非常なり

問題第六 英語にて紙をペーパーと稱する語原を問ふ

埃及人の文字を記するにはペーパー<sup>パピラス</sup>といふ草より紙を制して書卷  
を作りたりといへり英語にて紙をペーパーと稱するは即ち此埃及語の  
ペーパー<sup>パピラス</sup>の紙草より轉訛したるの語なりといふ

### 第二章 巴比倫尼亞及び亞述亞史

問題第一 巴比倫尼亞及び亞述亞兩國の興亡消長を問ふ

ティグリス及びユーフレート<sup>ユーフ</sup>河岸の地は土地肥沃なりしが爲め人間社  
會の發達に適當し加爾底亞亞述亞及び巴比倫尼亞の三王國相繼いで起

れり加爾底亞は一名前巴比倫尼亞と稱し紀元前二千三百年の頃ニムロ  
ドと云者國を建て首府を巴比倫尼亞に奠じ爾後千余年を経て亞述亞の  
爲めに亡ぼさる亞述亞人既に加爾底亞を亡ぼし尼々<sup>ニ</sup>府に都す其盛なる  
に當りては近傍諸國は勿論埃及の如きも其版圖に歸せり然れども反亂  
常に息まず紀元前六百二十五年馬太人<sup>メデア</sup>の入寇に際し加爾底亞人之と合  
して尼々府を陥れ亞述亞王國遂に亡ぶ亞述亞王國亡び加爾底亞王國再  
び起る之を後巴比倫尼亞と稱すチバカド<sup>チ</sup>ザルの時に至り隆盛其極に  
達し首都巴比倫の如きは結構壯麗人目を驚かせり(今日の倫敦と雖ど  
も其周圍僅に巴比倫の五分の一に過ぎずと云ふ)然れども其後數十年  
を出でずして波斯人の爲めに滅ぼされ世界奇觀の一として數へられた  
る巴比倫も今は斷跡荒墟空く狐狸の巢窟となり畢れり

問題第二 亞述亞國が強大を極めたる時の版圖を問ふ



紀元前九世紀の頃よりアッシリア國王はティグリス及びユーフラーツ兩河外に其領を擴張せんと欲しメソポタミア及びイラン地方を征伐し更に東征して沿濱諸國に手を延したり此に於て腓尼西亞人到底其敵し能はざるを察して降服し希伯流王國恰も内憂外患に際したるを以て容易に併吞せられ尋いで埃及國も亦其手に歸せり此三國は東方メソポタミア、ハビロニア等共に滅亡し悉く亞述亞王國の版圖となれり其強大なること以て知るべし

**問題第三** 巴比崙城の偉觀を記せよ

ナボポラサルといふ者巴比倫尼亞國を再興し其子ネバカドネザルの時巴比崙城を修拓せりバビロン城は方形にしてユーフラーツ河に跨り外廓の壁の高さは三百三十八英尺厚さは八十五英尺あり其宮殿及び其架空園の如きは世界今古無比の奇觀にして都城の大なることは今日の倫

敦と雖ども其周圍僅に巴比崙の五分の一に過ぐる能はずといふ

**問題第四** 亞述亞及び巴比崙尼亞の政体及び宗教を問ふ

亞述亞國及び巴比崙尼亞國の政体は共に君主獨裁にして世襲の君主を戴けり宗教は多神教を奉せり即ち數多の神々自ら生じ各自其領區を支配する者となせり而して諸神中最も著しき者を日月星の三者となす

**問題第五** 亞述亞人の文學技術を問ふ

亞述亞人の文學は巴比崙尼亞人及び埃及人には及ぶこと能はずと雖ども楨杆輓轡を使用し水道隧道を作り建築彫刻術は頗る發達しニネブの首府の如きは壯大華麗人目を驚せり其他土木若くは製造術も頗る開け殊に金銀の飾鏤玉石の彫刻の如きは最も盛に行はれたり蓋し日用の技術に於ては殆ど通せざる所なしといふ

**問題第六** 巴比崙尼亞人の文學技術を問ふ



巴比崙尼亞人は建築術に長じ且つ才學他に秀で古代の學問は殆ど皆濫觴を此處に發せりと云ふ殊に天文學數學の如きは最も早く進歩し前巴比崙尼亞の時よりして既に晝夜平分の期を知り且つ日時計を製して時間間を測りたりしと云ふ（アレキサンドル東征の時既に千九百三年前より天象を觀測して之を記載せるものありしと云ふ）蓋し此地方たる廣原漠々雲霧少く殊に夜間は一天澄清なるを以て星宿を觀るに便なりしなり此文字は所謂楔形文字キユティフナムにして今日學者の解せるものは三百字に近しと云ふ

### 第三章 希伯流史

問題第一 希伯流人の別名及び其祖先を問ふ

希伯流人は又猶太人イスラエル人とも云ふ其祖先はアブラハムナリ

問題第二 希伯流史の大畧を述べよ

希伯流人は元と一定の住居を有せず水草を逐ふて轉移せし遊民なりしが紀元前千三百二十年の頃始めて居所をカナンの地に占めたり政治は元來神政にして萬機は神意に従ひて之を執行せしが紀元前千九十五年サミウエルを立て、王となしたりサミウエルの子ダビッド、ダビッドの子ソロモン等賢明よして大に疆土を擴め首府をエルサレムに奠め殊にソロモン王の朝國勢最も盛大を極め印度アラビヤの地方に遠征したり然れども其後未だ久しからずして叛亂相次ぎ國勢衰頽し或は外國に服從し或は獨立し其後紀元前六十三年羅馬の大將ポンペーの爲めに征服せられたれども數々獨立を企てたるを以て紀元七十年羅馬のタイダスといふ者エレサレムを陥れ都城悉く灰燼に歸し國民四方に散亂せり

問題第三 西洋史中に於て特筆大書すべき希伯流人の宗教を記せよ

此國民は種族の統一と外敵の防禦に殆ど畢生の力を盡したるを以て世



界文明の上に差したる痕跡を留めずと雖ども彼等が當時隣邦に行はれたる万有神教(パール教)を偶像崇拜者として排斥し唯一神教を信じて今日西洋各国に行るゝ耶蘇教の起源をなしたるは西洋史上特筆大書すべきの一大事件なり世に舊約全書と稱するは即ち其經典なりといふ

#### 第四章 腓尼西亞史

##### 問題第一 腓尼西亞の概略を記せよ

腓尼西亞はリバノン山脈を負ひ地中海に臨める一小國にして國中には數多の都府分立し各獨立の君主を戴きて別に統一する所なかりき都府の中最も有名なるはシドン及びタイルとなす蓋此國の土地は肥沃ならざるを以て紀元前十一世紀の頃より主として航海に従事しリバノン山の松杉を伐つて船材に供し常に吹き來る東風に乗じて盛に航海通商しツブラルタルを越えて遠くバルチック海の諸島及び英國に至り琥珀錫

物品を齎し歸れり且つ又地中海沿岸波斯灣頭等處に殖民地を設け亞弗利加の(加爾勢地<sup>カルセツ</sup>西班牙のカディズ)の如き其(一なり)通商を便にせるを以て當時の海上貿易は全く腓尼西亞人の掌握に歸せり此に於て近隣の諸國皆其殷富に垂涎し亞述巴比崙尼亞波斯人等相踵で此國を侵掠し殊に希臘加爾勢地の貿易次第に隆盛に赴くに從ひ腓尼西亞人は海上の權を失ひ商業頓に衰頹を致し遂に紀元前六十三年羅馬帝國に併呑せられたり

問題第二 腓尼西亞人が文明を傳播したる功勞及び西洋の文學廣益を殘したる二事件を問ふ

腓尼西亞人は自ら文明を創造せし事なきも或は通商により或は殖民によりて埃及及び西述巴比倫尼亞等の文明を四方に傳播したる功勞固より少なからず殊に西洋史上最大發明ともいふべきアルファベットなる



音韻文字は實に此國民の作りたる者にして希臘人之を受け羅馬人に傳へ其間少しづゝ變化して遂に今日の羅馬字となり西洋の文學に最大なる裨益を興へたり此二件は實に先の希伯流人が耶蘇教の起源を造りたる一事件と共に西洋史中特筆大書すべき者なり

**問題第三** 腓尼西亞人の特性及び其工藝を問ふ

腓尼西亞人の特性は航海貿易に妙を得たるに在りて交通機關の未だ發達せざる太古にありて縱横に地中海を乗り回はし物品交換の媒介をなしたるは太古國民中他に比類なき所なり國民亦工業に富み自國の發明製造に係る硝子布類金屬の細工染料等を各國に販賣したり

**問題第四** 腓尼西亞人の政事宗教を問ふ

腓尼西亞は純然たる商人たる特性を有したる國民なるを以て政事上にも一種特別なる現象を生じたり蓋し此國は數多の都府分立して各獨立

の君主を戴き別に統一する所なきを以て外邦の侵掠を受け種々の君主に事へたりと雖ども常に不満の色なく自主の權租税の多少は彼等の毫も心頭に掛けざる所唯一心不亂に商業航海に従事せり此國民は日月星辰を神として偶像を尊崇し純然たる多神教を信奉せり且つ神に事ふるには最も殘酷なる禮式ありて人間を殺して神に供するの惡習慣ありき

**第五章** ペルシヤ 波斯史附馬太史

**問題第一** 波斯史及び馬太史の概略を叙せよ

馬太人も亦アリアン人種の一派にして波斯人と共に久く亞述亞王國の支配を受けしも紀元前六百二十五年に至り巴比崙人と力を協せて亞述亞を亡ぼし之を分領せり波斯王カムビセス亦其威に服し皇子サイラスを送りて質たらしむサイラス幼にして大志あり馬太に在ること數年逃して波斯に歸り時機を得て馬太を亡ぼし爾後二十餘年間兵馬の間に奔



率して東はインダス河より西はヘルレスポントに至るまで波斯の領地を擴張せり其子カムビス埃及を征服し次でダライアス一世位に上るに及び全國を區分して二十州とし一州毎に都督を置き更に官道を開き驛遞の制を立て以て往來通信を便にせりサイラスの鴻業此に至りて大成し帝國の基礎鞏固にして動かすべからず波斯人が二百餘年間西南亞細亞の全部を支配せしは一にダライアスの遺制に依るなり然れどもダライアス王以後は殘忍暴虐なる君主相繼ぎて出で世界の文明上には一も關係する事實なく獨り戰爭上に於て希臘史と關係あるのみ

**問題第二** 波斯人の特性及び其教育及學術を問ふ

波斯人は純然たる武士氣質を有し文事を好まず商工業を賤めり然れども獨り詩歌は都人士の嗜好する所にして而もフィルツシなる大詩篇を殘せり其教育其學術も其特性に基き馬術弓術及び誠心誠意の道を講

ずるに在り故に男子生れて五歳に至れば武術の教育に従事せしめ且つ艱難に打ち勝つの習慣を養はしめ十五歳に達するや否や皆軍事に服役せしむ故に体育は頗る長じて智育は發達せざり然れども武士氣質も後世に至りては次第に消磨し卑屈柔弱なる國民と化するに至れり

**問題第三** 波斯人の宗教及び工藝の發達せざりし所を問ふ

波斯人は武士氣質と武術の鍛鍊とによつて外國を征服しバビロニア、サアヤス等より毛布印度より織物希臘より金屬器具埃及より麻布ダマスカスより緞子其他の諸國より其國の製造物を貢獻せしめたるを以て此氣質と此便利とによりて工藝を發達せしむるの必要を見ざりしなり其宗教も始めは一神教なりしが其後に至りては偶像崇拜者と變し水土火までも之を禮拜し殊に拜火の如きは彼等が最も鄭重にする所にして高山の巔に火を設け火を点じて天火と稱しマヨなる僧徒は其火を看守



し決して之を消滅せしめず呪文を唱へて幻術を行へりといふ

## 第六章 印度史

### 問題第一

印度の建國及び國民の氣質を問ふ

印度は亞細亞南部に在る一大半島にして北方はヒマラヤ山脈に接し、シダス河ガンギス河其他諸川流國內に貫流し地味豊饒なる一大平原にして實に人間社會の組織に適せり此地には原住の土人ありしが紀元前三千年の頃波斯の東北部に住居したるアリアン人の一派なる印度人が漸々南伐して此土人を征服し始めて印度國を創建したり爾來印度は大に繁殖したれども土人と混和したると氣候の關係と食物に余りに充分なるとの結果有爲活潑なるアリアン人の特性を喪失し保守に傾き歐洲諸國と同人種なるにも係らず文明の性質を異にするに至れり

### 問題第二

印度人の族制及び其族制を生じたる所以を問ふ

印度には古代より人民に四階級あり第一は婆羅門即ち僧侶にして宗教上の事を主とし又文學を修む第二は釋帝羅即ち文武の門閥を總稱す第三は吠舍即ち農工商人を總稱す第四は戒陀にして工夫役夫其他の賤役者を總稱す此四階級は世々其身分を變ずることを得ず又此四族間婚嫁を通ずるを禁じたり蓋しアリアン人が印度に來りて原住人たる黒人を征服したるの初め印度人と土人との區別を保たんが爲め如此制度を設けたる者にして等級パルナなる印度語は實に色の義に外ならずといふ

### 問題第三 印度の宗教を問ふ

印度の宗教には二あり一は婆羅門教一は佛教なり婆羅門教は所謂万有教にして宇宙萬物を以て神となし靈魂輪回の説をなせり其後腐敗して種々の弊害を生じたり佛教は釋迦牟尼の創建したる宗教なれども固より婆羅門教より脱胎せり然れども一切の人類は皆平等にして少も等差



なしといふ新主義を主張して社會及び宗教上の改良を圖れり爾來佛教の勢力は日に月に盛大に赴きしを以て婆羅門教徒は之を嫉み悉く佛教徒を國外に放逐せり佛教徒は逃れて錫蘭に入り錫蘭より西藏に入り更に日本朝鮮支那等に傳播し現今に至りては世界の人口四分の一は佛教信者なりと云ふ

問題第四 印度の古文學を問ふ

印度は太古に於て宗教哲學共に大に進歩したり夫の婆羅門教徒の經典なるヒータスは紀元前千二百年の著述に係れりといふ且つ印度の古語を梵語(サンスクリット)を以て記したる哲學及び宗教の深遠高妙なる典籍は最も多しといふ

第七章 希臘史

問題第一 希臘人の種別を問ふ希臘の國名の起原を問ふ

希臘には古昔はペラスギーなる人種住居せしが後にアリアン人の一派なるヘレン人のために征服せられたりといふヘレン人を分つて四種となす第一はドーリアン人第二はアイヲニア人第三はエオリアン人第四はアケイアン人而シテ此四種層中其主要なる者をドーリアン人アイオニアン人の二種とあす抑も希臘の名は羅馬人の興へたる者にして今日に至るまで其名を用うると雖ども古代の本名はヘラスなりヘラスは實に希臘及び其近傍の地名なり

問題第二 希臘人の移轉及び其建國の年代を問ふ

紀元前二千年の頃セサリに住居せしヘレン人此地を掠奪せり之を希臘人の始祖となす其より漸々全國に蔓延し四種に分れたり其一種なるドーリアン人は紀元千一百年の頃族人相率ゐて其原住地なる北方を出立して内部に侵入しペロポネサスに在るアケイアン人を征服シラコ



ニアの土地を占領し漸々近傍の土地を服従したり是に於てペロポネサス半島の東南に在りたるアケイアン人は逃て北岸なるアケイアに至りアイチニアン人は更にアケイアン人に逐はれてアツチカに走り中部希臘の東南并にサイクレエツ諸嶋を占領したり但し此時エーチリアン人は中部希臘の西南岸に在りし且つアイチニアン人はリヂアの海岸よりシラス、サモス等の諸嶋に至りて殖民しドリアン人は小亞細亞の西南より近傍の諸嶋を占領し其他西は以太利に迄希臘の殖民見ゆたり

**問題第三** 希臘の文明が發達したる原因を問ふ

希臘の文明の發達は主として地理之を然らしめたる者なり蓋し希臘の内地は山岳起伏し國內を數區に分割するを以て數多の小邦其各區に割據したるを以て各邦共自ら自主獨立の氣風を養成し政事上の自由も夙に發達せり加之殖民地は氣候殊に溫和にして土地も殊に肥沃なるが上

に小亞細亞腓尼西亞埃及等に密接し水路の便殊に宜しきを以て此等諸邦の文化を吸収して以て歐洲各國に於ける文明の一大源泉を作るに至れり

**問題第四** 希臘國は政事上には箇々分立し心事上には一致結果せり此反對なる二現象を生じたる原因を問ふ

希臘が政事上箇々分立したるは地勢の然らしめるに基くは固より論を須たす之に反して心事上一致結合したる者は實に感情言語風俗等の相均しきに由れり是れ直接の關係なれども間接上大なる關係を有せり其一はアムヒクテラニと稱する宗教會議ありて各州の委員相會合し其二是五年毎に舉行せらるゝオリムピア祭の競技に全國の人民蟄集すること此二事は間接に希臘人の結合を維持繼續したる機關なり然れども他は猶一原因ありは他なし一致結合せざれば外國の侵入を防禦する能



はす國家滅亡の憂あればなり是れ政事上と社交上に反對の現象を生じたる所以なり

二十八

問題第五

雅典人と斯波多人の性質上の異なる点を問ふ

ドーリアン人は風俗質朴にして舊風を墨守し武を尙んで商業美術を賤み且貴族政体を好みアイオニアン人は華美を好み進取の氣象に富み商業美術を愛し又民主政体を主張せり故に外患なき時には此二人種相容れず相争闘して止まざるは實に免るゝ能はざるの内憂なり而してアイオニアン人を代表する者は雅典ドーリアン人を代表する者は斯波多なり故に雅典人斯波多人とはいふなり

問題第六

斯波多人が武術ヲ獎勵したる所以及びライカルカスなる者が立てたる新制度殊に一種異様なる教育法を記せよ

斯波多人は土人を従へ威をプロポントサスに振へり然れども人口少

く僅に舊來住民の十分の一に過ぎず故に其權力を維持せんと欲せば必ひ武を盛にし兵を鍊らざるべからず此を以て紀元前八百五十年頃ライカルカスなる人出で新に制度を定めたり其法に據るに人民の財産は多く共有とし微弱なる兒童は棄てて唯強壯なるもののみを養はしむ男兒七歳に至れば父母の膝下を離れて公立育兒院に入れ嚴峻なる教育の下に生長せしむ斯くて六十歳に至らざれば兵籍を脱する能はず(婦人も亦体育を怠らず随つて其心も雄々しく「汝の楯を提げ歸れ然らずんば其上に臥してよ」とは實に彼等が其子の出陣を送りたる辞なりしなり)且つ商業を禁じ美術を斥け金銀錢を廢して鐵錢を作り以て運搬不便にせり斯く此法は唯武を盛にする爲に立てたるものなるを以て其結果たる大に斯波多の武力を強くせしと雖ども文明は少しも進歩せず古來希臘人が誇れる文學技術の點に於ては此國人は少しも關係なきなり

二十九



問題第七

雅典人の政事及びソロンの新憲法を問ふ

三十

希臘はもと王政なりしが王政の滅ぶるや雅典にては大統領を撰み政務を総攬せしむ大統領は始めは一人にして終身官なりしも後には九人となり其在職期限も減じて一年となれり又議政官ありて國政を評議せり此の如く共和の體裁をなせしと雖も當初大統領及び議政官となる者は皆貴族のみにして平民は全く政權なく貧困の餘り身を賣りて貴族の奴隸となるものも亦少なからず且つ成文律なきを以て貴族は擅に平民を壓制し專横至らざる所なし紀元前六百二十四年に至りドラコなるもの成文律を作り以て國法を一定せしと雖も其法慘酷に過ぎ却て平民の不幸を増せり此に於て平民不平して貴族に抗し政令行はれず殆ど無政府の有様をなせり幸にして紀元前五百九十四年ソロン出づるに及び法律を改正し官吏は其職務に對して責任あるものとし負債の爲に奴隸と

せらるゝことを禁ずる等種々の改良をなし平民は貴族と同等の位置に進まされども皆參政の權を有するに至れり此新憲法は實に雅典盛隆の基礎にして其後紀元前五百年に至りクソセス大統領となり更に制度を更めて純粹の民主政體とせり此に於て雅典人は皆自由同等の權を得愛國精神勃興し遂に彼等をなして中央希臘に雄視せしむるに至れり

問題第八

希波戰爭の始末の概略を擧げよ

雅典斯波多二府の同時に盛大に赴くの際俄然希波兩國の戰爭起れり此時波斯王大ライアスは廣大なる領地を有し小亞細亞にある希臘の殖民地も亦其版圖に入れり後殖民地獨立を企つるに及び雅典人は兵を出だして之を助け波斯の都府を焼きしかば之が一の導火線をなし兩虎相闘はんと欲するの機忽ち來り大ライアス大に怒り希臘全土を蹂躪せんと欲して兵を起したり之を希波兩國戰爭の原因となす第一の戰は紀元四百



九十三年にして波斯軍は暴風雨のために苦められて空しく歸國せり第二の戦争は紀元四百九十年雅典の名將のために撃破せられ波軍大敗して歸國せり第三の戦争は紀元四百八十年にして希波戦争中最も主要なる者なり此戦は波斯軍一時は勝を制したれども遂には大敗し波斯軍の一兵も歐洲に留まる能はず一時東洋の天地を震動したる波斯帝國も此に於て終に歐洲に容喙する能はざるに至れり

問題第九 希波戦争中の Marathon の戦を記せよ

紀元前四百九十二年波斯王ダライオスはマルドニウスを將として海陸二軍を率ひて希臘に向はしめたり然るにアトス海峡の附近に於て艦隊は脆くも颶風の爲めに沈没し陸兵はトラキアニ敗れて効を奏せずして空しく歸國せり此に於て波斯王は大に憤り紀元前四百九十年再び大軍を整へ希臘に遣はしたり波斯軍は多嶋海を横ざりて急にエントリアに

上陸し希臘の前僭王ヒッピアスを先導としてアッチカ州に向ひアテン城外マラトンの野に陣せり然るにアテンの勇將ミルチアデスの爲めに波斯の全軍復た大敗したり

問題第十 サモヒリーの戦争及び其結果を問ふ

波斯王はマラトンの野に敗せしも猶ほ之を意とせず三たび海陸軍を糾合して希臘を討たんと企てたりしが不幸果さずして没せしかば其子クセルクセス父の素志を継ぎ紀元前四百八十一年自ら二百万の大軍を率ゐてヘレスポントの海峡を渡り艦隊はトラキアの沿岸を走り雲霞の勢を以て希臘に逼れり沿道の諸州概ね風を望みて波斯軍に降り進んで之が防禦の衝に當りしは只スパルタ及びアテンの二州ありしのみスパルタは列國の盟主に仰がれスパルタ王レオニダスは精兵三百副兵數千に將としてサアモヒリーの要險を守り以て波斯の大軍を防げり然るに波



斯兵間道より侵入せるに際し、奈寡敵せず、レオニダスは三百の兵士と共に首を列ねて國事に殉せり。此時アテンの海軍はエウボア島の北方にて波斯艦隊と交戦したりしがサーモビリーの敗報に接して退軍し中央希臘の地今や全く波斯軍の蹂躪する所となれり。

問題第十一 サラミス戦争及び其結果を問ふ

希臘國は波斯人のために蹂躪せられたりと雖も其勢を回復したるは實にサラミスの海軍なりとす。此時アテンの名士セミストクルス出で、國民を諭すに勝算の確かなるを以てし先づ老幼婦女をペロポネテリスに送り壯丁を船に集めサラミス灣頭に一戦せんことに決したり。紀元前四百八十年波斯王はアテン城を焼き岸に坐してサラミスの海戦を熟視したりしが希臘の船艦縦横に馳驅して大に波斯艦隊を破れるを見、惶惶爲す所を知らず陸兵を遣して本國に逃げ歸り、又かくも希臘の危機を一

轉して大勝を得せしめたるは蓋し前きにセシストクルスがアテンの海軍を改良發達したるの功多きに居るなり。波斯の殘兵は勢ひ屈して北方に退陣したりしを希臘人は機に乗じて之を追撃しプラタイアイの決戦に於て大に之を破れり。尋で希臘の艦隊はミカールの岬に於て波斯の艦隊を襲撃して之を掃滅せり。

問題十二 ペリクルス及び其善政を問ふ

紀元前四百六十一年の頃ペリクルスなる者あり、専ら雅典の政治を執れり。ペリクルスは元來名族の出なれども民主主義を主唱し其黨派の首領と爲り自ら政を攝するに及では務めて國憲を改良し雅典民主政をして基礎を確かならしめ其名聲を發輝したり。ペリクルスは紀元前四百二十九年に至て病歿せしが在職中雅典の文運は實に全盛を致し文學技藝若くは能辯術の如きは殊に比類を前後に絶せり。希臘が世界の歴史に名譽



を垂れしは全く此時代に在りとす

問題第十三

雅典斯波多の戦争即ちペロポネサスの戦を問ふ

スパルタ、アテン覇権の争ひにして人種政略の異同自ら其衝突を來し  
たるなり例々コリントス州と其殖民地なるコルキラとの間に紛擾起る  
に際しアテンは、コルキラを援けスパルタはコリントスに左袒し此に  
干戈を交ゆるの端緒を開きぬスパルタは進撃方針を取り直ちにアテン  
を攻むアテンはペリクルスの策を用ひて防禦に決し城壁に籠りたりし  
が不幸にして疫病城内に發し將士爲めに斃るゝ者數万ペリクルス躬ら  
其犠牲となれり之をペロポネサスの戦といふ然れども城堅くして容  
易に落ちず兩軍の勝敗決せざること殆ど十年遂に紀元前四百二十一年  
ニキアスに五十年間の休戦條約を結びぬ休戦の日猶淺きにアテン人は  
紀元前四百十六年兵を出してシチリア遠征を企てたり蓋し其地に存せ

るドリア民族の殖民地なるシラクセー市を陥れ以て間接にスパルタの  
勢を挫かんとの心底に外ならず然るに謀大に齟齬し却てアテン軍は到  
る處に敗北し紀元前四百五年スパルタ軍はエエスポタモンの海戦に於  
てアテン艦隊を破りてよりアテンの軍勢頓に消沈したりスパルタ軍は  
此機に乗じてアテンの要港ピレウスに上陸し大擧してアテンを圍めり  
アテン人は必死の抵抗を試み然れども城内糧盡きて如何ともすること  
能はず終に降を請ふて和議を約するの止むを得ざるに至りき

問題第十四

スノーブスの戦争及びスノーブスが希臘の盟主となりし概

況を問ふ

斯波多人既に雅典を倒し武威を恃みて列國を壓制せり此時に當り齊武  
士にエパミノンダス及びペロピダスなる二人の英雄ありて國人を勵ま  
し斯波多人に抗して之を破り(齊武士戦争)齊武士は一蹴して希臘列國



の長となりたれども兩雄死するに及び其國勢も共に去り是より希臘の國勢衰ふるに至れり

三十八

問題第十五 雅典とス波多との權力消長の概略を記せよ

ス波多には紀元前八百五十年の頃ライカルガスなる英雄出でて、ス波多の武力を強健にせり雅典には紀元前五百九十四年ソロンなる英雄出でて新憲法を布き雅典の隆盛の基を開き紀元前五百十年にはクリスセス大統領となり純粹の民主政体となし雅典の愛國精神を勃興せしめたり元來此二都は其氣質政体に於ても大に異なるが上に殆ど同時に隆盛に至り何れも希臘の覇權を握らんと企圖したれば此二府の戦争は紀元五百年頃には必ず起るべき勢なりしが恰も波斯の來寇に遇ひて一致結合して之を防戦したり然るに希臘、波斯兩國の戦に希臘の戦勝を得たるは實に雅典人の功多きに居りたるを以て其戦勝の威力を自み希臘の

覇權を掌握し諸同盟の諸國を壓倒し私欲を逞したるを以てス波多人豈之に屈從せんや乃ち忽ち二國間干伐を以て相見るに至りス波多軍はペロポネサスに於て雅典軍を破り兩州の葛藤こゝに於て其局を結び希臘の覇權を掌握するに至り雅典は大に其威力を墮したるのみならず此内亂のために希臘全國の衰頹を生ずるに至れり

問題第十六 雅典のセミストクルス、アリストタイデス兩雄の政事上の意見の衝突及び希臘人が波斯の大軍を撃破したる大功の主なる原因を問ふ

セミストクルスは敏捷果斷なる政事家にして大に海軍に力を用ひ以て波斯の來寇に備ふべしと主張しアリストタイデスは廉潔方正なる愛國者にして海軍擴張に反對し全力を用ひて之に反對せしかば國民は遂にアリストタイデスを國外に放逐せり是に於てセミストクルス自己の持論を

三十九



實行することを得て盛に海軍を擴張し以て波軍の侵襲に備へたり他日  
希臘人が波斯軍をサラミス海に於て撃破して大勝を得たるは實にセミ  
ストクルスの功多きに居れり其後アリストタイデス波斯戦争中本國に還  
るを從て國民に敬重せられたれども久しからずして死せり嗚呼彼海軍  
擴張に反對せるにも係らず如此好地位に復したるは實に主として廉潔  
方正なる愛國者たることを國民に信せられたるによるなり

問題第十七 希臘の政治に就て記せ

上古の諸國特に東洋諸國は専制武斷の政治を以て國を立てたるにも係  
ばらず希臘のみ早く民政主義を發達せしめたるは實に希臘の名譽と云  
はざるべからず蓋し東洋諸國の君主は衆多の臣民隸屬を有したれども  
然れども正實に所謂政治社會の人民と云ふべき者は未だ成立せず獨り  
希臘に至りては政府は人民より成立ち民主主義に則とり東洋諸國の如

く君主の爲めの政府にあらずして人民の爲めの政府たりし故に人智の  
進歩頗る著しく文學技藝も無雙の發達を爲したり

問題第十八 希臘の宗教を問ふ

宗教は初めに萬有神教に類し自然の現象を崇拜し而して其神祇は東洋  
諸國の多神宗教の如く雜多なりしと雖ども而も尙ほ諸國に比すれば大  
に進歩し殘忍蒙昧なる謬信あることなし神祇にアリムヒア神と稱して  
十二體あり其内ゾエヒタと云へる神は他の諸神の首長にして而して他  
の諸神は各水火軍事耕作商業詩歌音樂等を司とれり然れども後年に及  
びては埃及小亞細亞等の宗教輸入せられ種々の混淆を來したりと云ふ  
希臘人は又大に神託を信じ神託に依て事を決するの習慣あり特にゾエ  
ヒタアポロの神殿は最も有名にして諸國の人々茲に神託を受くる者甚  
だ多かりしなり



問題第十九 希臘の工藝技術を問ふ

四十二

工藝技術に於ては希臘人は建築及び彫刻に最も妙を得たり蓋し國內に大理石の如き好材料の産せるに由るなるべし建築は太古よりドリア風及びイオニア風の二種あり建築彫刻共に皆宗教的に發達したるものなるを以て神殿の如き若くは神像の如きは實に絶世の妙致を極むと云ふ而して其最も隆盛に赴きたるはペリクレスの時代なりとすドリア風を以て造れるアテン城内のバルテノン神殿は建築の標範と稱しフヒヤアスの手に成れるバルテニア殿内の神像は彫刻の極妙に達せるものなりと云ふなり

問題第二十 希臘の哲學を問ふ

哲學は初め小亞細亞に於ける殖民地に起り漸次に内地に發達し宇宙の本源を究むるを専とせしが其後詭辯家(ソークリスト)と稱する一派出で

一時人心を刺激したれども其止の哲學はソクラテスより始まる彼は形而上學を研究し特に自己の認識と道徳とに重きを措きたりソクラテスの門弟にして後世哲學の鼻祖と仰がるは觀念論を説きたるプラトソありプラトンの弟子にアリストテレスありて倫理、政治、論理、修辭等諸學科の基礎を立てたり三人共に希臘哲學の元老たり

問題第二十一 希臘の史學を問ふ

史學には史學の父と稱せらるゝヘロドトスを始めツキヤデス、クセノフォン等の名家出でたりヘロドトスは波斯戦争記を著しツキヤデスはペロポネネリス戦争記を編したり特にツキヤデスが史學は公平着實の精神を以てせざるべからずとせるは後世史家の龜鑑とすべき所なり

問題第二十二 希臘の美文を問ふ

美文の最も早く發達したるは史詩にして希臘の詩聖と稱せるホメーロ

四十三



スの作を以て其極とす尋で行情詩起りアナクレオン、ヒシダルの如き名家輩出しアテン全盛の頃に至りては戯曲其妙に達せり當時悲戯の名家としてはアイスヒルス、ソフオクレス、エウリピデスの三人あり又喜戯に於てはアリストフツテスの名千古に高し而して此等美女の隆盛なるに伴ふて演戯の發達を來し宏大なる戯場の設け具さに備はれり

**問題第二十三** オロープエッタの大祭が希臘の文明及び人心に如何なる影響を與へたりしや

國中には大祭四個あり最も大なるものをオリンピクと云ふ此等の祭日には人民四方より集りて武人は武藝を闘はし文人詩家は著作を朗讀し其他音樂師、美術家等皆來りて三、四藝能の共進會とも名くべきものなるを以て唯に文明の進歩を促せるのみならず列國平素の怨を解きて一場に會合するより自ら希臘全體の一致を助けたり

### 第八章 麻世敦國史

**問題第一** 麻世敦の勃興及びフィリッパ王希臘征服を問ふ

希臘の北方に國を建てたる者を麻世敦といふ國民は蠻民として夙み希臘人のために輕蔑せられたりしも紀元前四百年の頃フィリッパ王此國に興り大に國權を伸張し希臘の文化を輸入して自國の形勢を一變し希臘の國力靡弊したるに乗じ之が覇權を掌握せんことを企てたり會々希臘には雅典、斯波多、齊武士の戦争起りたればフィリッパは好機乘ずべしとなし紀元前三百五十八年軍兵を希臘に遣はし遂に之を征服し之を自國の領土中に併せたり

**問題第二** フィリッパの野心及び希臘人を籠絡したる手段を問ふ

フィリッパ既に希臘を征服せり然れども希臘人は動もすれば反旗を起すの傾向ありしが故フィリッパは己れ功名を希臘中に輝かし以て民心



を籠絡せんと欲し、コリンスに州會を開き、波斯亞の舊罪を問はん爲め、遠征軍を起さんことを主唱し、而して自ら其都督と爲れり。然れども其遠征の備準成らざる内臣下の爲めに、刺殺せられたり。

**問題第三** デモステチスがフィリッパが野心を看破して雄辯を奮ひたるを記せよ。

フィリッパが希臘を併呑するの野心あるや、アテンの名士にして後世辯説の泰斗と仰がる、デモステチスはフィリッパスが希臘の覇權を握らんとするの心底を察し、快辯を奮て列國を聳動し、兵を募りて、フィリッパスに抗したれども、大勢の既に動かざるを如何せん。

**問題第四** 歴山大王の雄圖及び其版圖其遠征を問ふ。

紀元前三百三十六年、歴山大王父フィリッパに繼ぎて位に即く時に年二十、大王天資英邁、謀略あり、善く兵を用ゐ、父の遺志を次ぎ、希臘の將帥の推

す所となり、總軍三万五千に將として、波斯への遠征を挙げ、ヘルレスポンドの海峡を斷ち、小亞細亞より波斯に侵入せしが、向ふ所皆敵なく進んで、印度に迄至り、初めて兵を回せり。大王の遠征を企つるや、致る所風靡して、服従し、亞細亞の西半は全く其領屬に歸し、亞非利加の中にては、埃及亦版圖に入れり。夫のアレキサンドリア府は實に大王の創設したる所なり。故に其版圖の大なる未曾有と稱す。蓋し大王の志望は、諸方の人民を征服し、首府をバビロンに定め、以て一大帝國を樹立せんとするに在りしを以て、大王は務て希臘人と波斯亞人との調和を圖り、二國人をして互に婚嫁を通せしむることを獎勵し、己れは率先して波斯亞王の皇女を娶り、且波斯亞人を官吏若くは軍兵に採用したること多かりし、而して其政治を行ふや、慈惠溫和を常とし、時に嚴格なる規律を以てしたり。然れども目的を達するに及ばず、紀元前三百廿三年、亞刺比亞を征伐せんとするに臨み、偶



ま病に罹り空しく志を棄ちしてマヒロンの城中に歿せり年三十三

問題第五

歴山大王死後其版圖の分割を問ふ

歴山大王歿して嗣子なし功臣各封を争ふこと多年茲に至て廣大なる王

國も殆んど四分五裂せしが紀元前三百一年に至り其競争は一旦結束し

王國は凡三部分に分れセリユークスはシリア及び其東部を取りトレミ

ーは埃及を取り而してカサンデルはマセドン本國を領することゝなれ

り

問題第六

分裂後の埃及史の概略を記せよ

埃及はトレミー王朝の支配する所となりしが其歿するの後も子孫

世をトレミーの名を以て埃及に君臨し紀元前三十年クレオパトラ女王

歿するに及び羅馬の版圖に歸したり第一世トレミーは賢君にして國政

に精勵したりしを以て爾來埃及は隆盛に赴きアレキサンドリア港は地

中海濱第一の大都會となり歴世の君主は文學技術を盛にしたるを以て

科學頗る進歩し文典數學等は特に盛なりき

問題第七 分裂後のマセドンを問ふ

マセドンはカサンテル王武を以て國を治め國富兵強かりき希臘國は殆

ど其領地に歸し守備兵を各市に置き警備甚嚴なりしを以て希臘人は回

復を圖りしも事ならざりき其後紀元前百六十八年羅馬に征服せられ同

じく百四十六年希臘も亦羅馬の版圖に歸したり

問題第八 分裂後のシリアを問ふ

セリユークスがシリアに君臨せしより次第に版圖を擴張し東はイソタ

ス河より西はユーフラッ河に及び後更に小亞細亞の大半を蠶食せし

其狀恰も波斯國を希臘國に化したるに外ならず其實獨立せる諸州が

薄弱なる同盟をなしたるのみ紀元前六十五年羅馬に征服せらる



第九章 羅馬史

問題第一

羅馬の起原及び其人種を問ふ

紀元前七百年の頃伊太利の中部に於てはアリアン人の一民族が漸く發達するの氣運に向へり當時伊太利の中部にはラチン人アンブロン人サベリアン人サベリアン人エトラスカン人が長年月の間に相混化しテタイバー河邊に一府を建設せり之を羅馬府の起原となす然れども後日羅馬の大國を建設したる主動者は實にラチン人となす

問題第二

羅馬史を分ちて何期となすか

第一期は王政時代第二期は共和時代第三期は帝政時代となす  
第一節 王政時代

問題第三

王政時代の概略を記せよ

元來羅馬人は貴族及び平民に大別せらるる貴族の權は實に強大して羅馬府には初め撰擧せる國王ありしが後軍制組織となして大に近隣を征服し領土の擴張を計れり而して被征服地の人民は凡て之を平民(プレベス)に編入して參政の權を得ざらしめ府民は自ら貴族(パトリキ)と稱して政に與り平民とは恰も主従の關係を爲す者あり紀元前五百七十年の頃國王タルクインは憲法を改正して平民の位置を高め軍制を改めて兵事議會を設け之に宣戰媾和の權を附與し以て貴族平民の結合を完ふし國勢を發達せんこと務めたりしに貴族等之を肯せずして幾何もなく國王を廢して共和政治となしたり

第二節 共和時代

問題第四 貴族が平民を虐待せしこと平民が貴族に反抗したる概決を記せよ



スルクイン王追放せられて後十五年共和政治の尙は幼稚なるときに當り羅馬には大なる内亂起れり當時羅馬に於ては萬般の政務は貴族の手中より出で平民は壓制を蒙ること甚しく剩へ平民は貧困の輩多くして大抵は貴族に負債を有したり然るに債主の負債主に對する待遇多た苛酷にして若し負債主が償還期限を誤ることあれば或は住家を奪ひ或は之を監禁し從て多くの平民は殆ど奴隸の境域に呻吟したりし又兵後には服したるは重もに平民たるに係はらず戰爭の際敵國より取りし地は平民に分付せず貴族のみにて占領せり是等の事よりして平民憤懣に堪へず相連合して聖山と稱する所に屯集し茲に都會を開き全く羅馬より分離せんことを決定せり貴族聞て大に驚き人を遣して之に説き結局雙方締監して和を講じたり

**問題第五** 貴族平民講和の二條件民權發達の端緒を問ふ

講和に二條件あり第一負債者の極めて貧困なる者には償還の責任を免じ又負債の爲めに奴隸に使役せらるる者を赦免する事第二平民中より保民官を撰擧し平民の權利を保護せしむる事是なり此保民官の權力は非常に重大にして元老院にて議決したる法律命令も果して平民に有害なりと思惟するときは何時にても之を禁止するを得たり而して其任期總て一年にして定員は二人なりしなり後毎に至りては十八人に改めたり

**問題第六** 平民議會及び民權の擴張を問ふ

護民官の設置と同時に平民議會なる者起れり蓋し從來羅馬には元老院貴族立法院及びコミシアセンチュリアタの三議院あり而してコミシアセンチュリアタに於ては平民も貴族も同じ席次を占むることを得れども實際上平民の勢力は殆ど有ることをなし法律は大抵貴族の手のみにて



定制したりしなり平民乃ち茲に於て平民議會を起せしが議會の職務は  
最初保民官を撰擧するに止まりたれども他の諸議會が漸々勢力を失ふ  
に及びて其勢を益々擴張し後年に及では最大權力を全國に振ふことぞ  
得たり

問題第七

成文律即ち十二銅標の法文の制定及び其結果を問ふ  
平民は種々の事よりして次第に貴族の壓抑を免れたれども尙ほ之れに

満足せず成文法律の編纂の制定なきは甚だしき缺點なりとし元老院に  
迫り法律編纂の爲めに廣く貴族平民中より十人の委員を撰ばしめたり  
時に紀元前四百五十一年なり此委員が刻苦して編纂したるもの即ち所  
謂十二盤法とす但し初め此委員は單に法律編纂の爲めに設けられたる  
者なりしに後に至り執政官保民官共に廢せられ委員之に代りて政治の  
事迄も司ることゝ爲りたり

問題第八

羅馬人諸隣國を征服したるを記せよ

羅馬にては貴族と平民との争久しく絶えず王政の時代に於て得たる所  
の領地も次第に隣國に削られ纔かにタイバー河邊の數邑を保つに過ぎ  
ず是を以て羅馬人は先づ四隣を伐ち以て獨立を固くせんと欲しラテン  
戦争及びサムニート戦争にて近隣の諸邦を従へ次に以太利の南方に在  
る希臘の殖民地と戦ひて之を破り更に方向を更へて北方ゴール人を服  
し紀元前二百六十六年の終りには以太利全國皆其支配に歸せり

問題第九

ゴール人に侵入せられ羅馬の危急なりしを問ふ

今や羅馬の國運は次第に進歩の徴候を現したるに紀元前三百九十年に  
至り會々ゴール人の爲めに侵入せられたりゴール人は以太利北部に住  
せしが此時軍兵を南しエトルリアを蹂躪しアルリアに在る羅馬人を破  
り進で羅馬府に入り市街を焚き其牙城を圍り然れども城陥らざるこ



と七月に耳リマール人も長圍に倦み羅馬より償金を取り兵を回し羅馬も僅に残喘を保つことを得たり

五十六

問題第十 羅馬が加爾勢底を征服したること加爾勢底が征服せられたる所以を問ふ

羅馬人は以太利を一統し内顧の憂なきに至りたるを以て更に海外諸國を征服せんと欲せり此時に當り羅馬人の最も恐るゝ所は加爾勢底人にして(亞弗利加の北岸地中海の諸嶋及び西班牙の一部を領す)其領地の廣大なる亞弗利加のみにも三百餘の都府之に貢せりといふ然れども人民自治の精神に乏く且つ純然たる商業國なるを以て尙武の風なく政治亂れ道徳廢したり是を以て羅馬人の銳鋒に敵する能はず遂に其併呑する處となれり

問題第十一 羅、加第一回の戦争即ち第一ヒュニツクの戦争及び其顛末を問ふ

第一ヒュニツク 役は紀元前二百六十四年より同二百四十一年まで繼續したり初め陸戦にては羅馬軍勝ちを得しも海戦にては屢々敗歩するを以て羅馬人は爾來大に艦隊を編成し之を練習シカールセーラの海軍を破り進で其本國にまで之を追跡し羅馬軍全勝を占め償金をカールセーラより支拂ひシ、ローに在るカールセーラ領は之を羅馬の外領に歸せしめたり羅馬外領は之を以て初めとす

問題第十二 羅、加第二回目の戦争即ちヒュニツク第二戦争及び其顛末を問ふ

第二回の戦争はヒュニツク 戦争中最も有名なるものにして紀元前二百十八年加爾勢底の名將ハンニバル西班牙よりアルプス山を越へて以太利に入ら連戦羅馬軍を破り羅馬の危きこと累卵も童ならず此時羅馬の

五十七



大將スシツヒオ奇計を施しハンニバルの銳鋒を避けて亞弗利加に航し  
 加爾勢底の本國を伐つハンニバル呼び還され已むを得ずして以太利を  
 去り次で加爾勢底人和を請ひ償金及び軍艦を羅馬に獻じ西班牙其他地  
 中海の諸島を棄却することを約し事平々時に紀元前二百一年なり  
 問題第十三 ヒューニク 第三の戦及び加爾勢底の亡滅を記せよ（羅馬  
 人の虐殺）

羅馬人は加爾勢底人の再び興りて先年の怨を報いんことを恐れ加爾勢  
 底人に告ぐるに海岸の市府を撤去し内地に退去せざれば討伐するを以  
 てしければ加爾勢底人も早や堪ふること能はず奮然起て羅馬に抗せん  
 ことを一決せり時に紀元前百四十九年なり第三ヒューニク 役は斯か  
 る事情起りし故加爾勢底人は頗ぶる憤發し老弱男女擧て防戦し屢羅馬  
 軍を退却したれども當時加爾勢底には軍艦兵器も存在せざる程なれば

敵軍に圍まるゝこと四年の後都府を攻落され市府悉く燒燼せり羅馬則  
 ち此地を以て外領と爲し太守を派遣して之を支配す

問題第十四 羅馬共和時代の盛衰の概況及び希臘の文明が羅馬に如何な  
 る影響を及ぼせしか

羅馬人は加爾勢底を亡ぼしたる勢に乗じて麻世教、希臘、小亞細亞、西  
 里亞等をも征服し紀元前百三十三年に至りては地中海沿岸の諸邦は皆  
 其所領に歸し各地に統督を遣し之を治め租税を集めしむ羅馬人は此等  
 の金を以て盛に工事を起し道路溝渠橋梁等を築造し羅馬府は一躍して  
 世界の首府となり壯觀繁盛を極めたり然れども此時より國人奢侈に流  
 れ廉直勇武の風次第に衰へ殊に此頃より希臘の學者踵を接して羅馬に  
 來り羅馬の文學亦之に由りて起りたれども其弊風も亦大に羅馬に入り  
 人心を柔弱ならしめ道德地を拂ふに至れり且つ此時より貧富の差大に



起り富者は屬地の人民を以て奴隷となし之を使用して農工商を營まし  
ひ此の如くなるを以て貧民業を失ひ不平に堪へず是等種々の原因相合  
し遂に内亂避くべからざるに至れり

六十

第三節 内亂時代

問題第十五 内亂時代の富民黨貧民黨兩者の争を略記せよ及び兩黨首領  
の名を問ふ

貴族と平民の争は既に去つて富者貧者の争方に來れり始はクラッカス  
兄弟相繼ぎて護民官となり貧民を助けて富民の權力を殺がんと欲した  
るも其志を得ずして兄は富民等の毒手に罹りて死し弟も亦富民黨に要  
撃せられて自刃し尋で富民黨の首領シユラ及び貧民黨の首領マリナス  
との争となり此兩人或は勝ち或は敗れ此二人のために殺戮せられたる  
人民は十五万の多きを達し實に無政府の狀を呈し羅馬國の事亦如何と

もすべからざるに至れり

問題第十六 内亂時代に於ける第一の三頭同盟及び三頭人の權力の消長  
を問ふ

此無政府時代の際に當りて羅馬國には三人の英雄を田したりシーザー  
及びクラッシス及びポンペー是なり而して此三傑中文武の才器最も長  
じたる者をシーザーとなすシーザーはポンペー及びクラッシスと結約  
して政府黨を仆し遂に羅馬の主權を握りたり之を第一三頭同盟といふ  
シーザーは擧げられて大頭領となり任滿つるに及んでゴールの大守とな  
り前八年間を以てゴール及びブリタニヤを征服しクラッシスは東方を伐  
ち戦敗れて殺され羅馬の中央政府の權力はポンペー一人の手に歸した

問題第十七 シーザー、ポンペーの政權の争及び其顛末を問ふ

六十一



ポンペーは中央政府の權柄を掌握せしより大に威福を擅にしシーザーの功名を嫉みシーザーの任期未だ盡さざるにも係はらすエールの大守を奪ひ部下の兵士を解散せしめんとしたるを以てシーザーは大に怒り紀元前四十九年に兵を率ゐて羅馬に歸りポンペーを撃破しポンペーは敵すること能はず埃及に入り國王に殺されたり

問題第十八

シーザーの善政其希望及び刺殺せられたる所以を問ふ

紀元前四十九年シーザーは羅馬の政權を握りてより農商を盛にして曆法を初め劇場殿堂等を建て沼を乾し河を疏し其他種々の大工事を起し且つ地方制度を定めたる等僅かに二年間の短日月を以て彼が爲したる偉業を思はば驚愕の外あらざるべしシーザー人と爲り精悍威ありて猛からず才智絶倫にして兵法、政治、法律、辯論、史學、數學、建築術等一も達せざるなし當時羅馬は共和政治の積弊を受け騷擾常に絶ゆるを以

て自ら舊制を破り終身インペレーター（大將の義なり後世のエンペロ）ンは之より轉訛せるなり）の位に在りしと雖も敢て其權力を濫用することなく羅馬全体の利益を圖れり是を以て羅馬の人民は皆シーザーに心服せしも豪族中にはシーザーの威權獨り盛なるを妬み共和と自由とを回復するを名とし密に黨を結びカンクス及びブルータス之が首領となり遂に紀元前四十五年シーザーを刺殺せり

問題第十九

第二三頭同盟の政事及び三人の末路を問ふ

シーザーが刺殺せられてより羅馬は再び大亂となれり此時に乗じてシーザーの姪オクタヴィウスなる者アントニー及びレピダスなる者と結合し國政を整ふるを名として紀元前四十二年第二の三頭盟を組織しシーザーを刺殺したるカシアス及びブルータス二人が希臘地方に潜匿するを追跡して戦ふて之を殺し三人は羅馬領土の分轄をなしオクタヴィウス



—スは西方諸國を得、アントニーは東方諸國を領しレビタスは亞弗利加地方を治めたり其後レビタスはオクタビュ—スに降り三頭同盟はこゝに破れたりと雖どもアントニーは埃及に據りオクタビュ—スに對抗して自殺しオクタビュ—ス全勝を得て羅馬を一統し遂にオーガスタスの位に陞れり

第四節

帝政時代

問題第二十

オーガスタス治世中の羅馬の隆盛を叙せよ且つ此帝の治世中の最大なる出來事を記せよ

紀元前二十七年オクタビュ—ス、オーガスタスの稱號を得此年を以て羅馬皇帝政治の始めとす此時羅馬の領地は歐羅巴の大半亞弗利加の北岸及びユーフレ—ツ以西小亞細亞の地方をも合せ其人口一億に下らざりし

りしオーガスタスは此等の屬地より得る處の租税を以て水道浴場殿堂劇場等を増築し市民には穀物を配與し觀劇と宴會とに日を消して政治上に意を向くる暇なからしむ此時に於て羅馬の文學亦盛に起りパーソル・ホレ—ス等の如き名家出でたり然れども帝の在位中最も記憶すべき事實は耶蘇基督が猶太に於て生れたることにして實に宗教歴史上最重要な出來事とす

問題第二十一

兵士の專横及び天子を廢立したる狀況を略叙せよ

始め羅馬には親兵なる者あり國內の精銳なる者を撰擇して之を編成し其數凡一萬前後あり以前は諸所に散在せしがダイベリアスの頃に至ては相集て一所に屯集し而してダイベリアスは之を利用して己れの威力を維持したりしが夫より後年に及んでは其親兵頗る勢力を得隱然國家の實權を握れり故に親兵は恣に帝王を廢立することを得元老院も敢て之



れが命に背くことを得ず随意に帝王を擁護し或は之を廢祚し甚しきは之を弑逆し久しく其威權を逞うしたり而して晩年に至りては隊伍の異なるに従て各所好を擁立することありたれば全國中二人の帝王を戴くが如き奇觀を呈したることあり

問題第二十二 北蠻の侵入及び遷都を問ふ

兵士の専横及び皇帝の並立するに當りて北方野蠻人種次第に南下して境土を侵すを以て皇帝の中には羅馬を去りて北方に都を遷し以て野蠻人の侵入に備へたるもの少なからず

問題第二十三 帝國が分立したる所以を問ふ

紀元後三世の終りに至りディオクレティアン帝位に即くや到底一人の力にて能く此の廣大なる版圖を支配する能はざるを看破し其將マゼンティアンを撰びて同じく帝位に即かしめ帝國を二分して其一を治め更に

副帝二人を撰びて政を輔けしむ

問題第二十四 東西羅馬兩帝國の起原を問ふ

コンスタンティン大帝に至り都をビザンティウムに遷し再び全國を統一す後數代を経セドシユース帝卒するに臨み帝國を東西に別ち其二子に分與せり是れ實に紀元後三百九十五年のことなり

問題第二十五 帝國時代に於ける羅馬の權力が平等に至りたる始末を問ふ

始め羅馬人が以太利を一統するや羅馬府民は凡て政治上の主權を專有し其他の人民は皆中央政府の施政に向つて喙を容るゝ能はず且つ羅馬人は處々要害の地に殖民地を置き以て反亂を制し易からしむ次で海外諸國を征服し版圖を廣むるに及び以太利人に與ふるに羅馬府民の特權を以てし其他の諸國は郡縣として羅馬より州牧又は總督を派遣し之を



治めしむ然るに州郡の人民も次第に羅馬の風に化したるを以て彼等にも亦羅馬府民の特権を與へしより終には伊太利と州郡との區別相混同し紀元後第三世紀の初めに於てカラカラ帝は令を發して明に此區別を廢せり

問題第二十六

北蠻が西羅馬を壓服し西羅馬帝の滅亡を問ふ

羅馬府民の特権も已に其價値を失ひ且つ府民は一般治に狎れて武を忘れ兵士の如きは皆野蠻人を雇ふて國防に當らしめたる程の事故如何でか能く北方強悍の野蠻人に抵抗し得べき紀元後第四世紀の終りよりヒロニヌス・ハンス等續々踵を接して以太利に入り當時西羅馬には尙皇帝ありしも實權は全く蠻民の手に移れり紀元後四百七十六年に至り西羅馬帝ロミヌスオーガスチユルス位を東羅馬帝ゼノに讓るゼノ之を諾し日耳曼人種の一酋長オドアーサーを以て以太利王とす西羅馬帝國

此に至りて亡ぶ

問題第二十七

東羅馬マヤスチニアンンの治世及び羅馬法を問ふ

紀元五百二十七年より同五百六十五年までマヤスチニアン帝位に在り此間を以て東羅馬帝國の最も隆盛なる時代となす帝は大に土木建築を興し國內に壯麗なる寺院殿堂を建てて以て古希臘以來の技術を不朽に傳へ僧侶商賈を奨勵して支那の養蠶法を習得せしめ之を歐州に傳播し其最も大なる惠を歐州諸國に遺したる所謂羅馬法は實に此帝の編纂序次して所謂民法の淵源を創作したり其効績實に千古不滅といふべし

問題第二十八

東羅馬帝國の亡滅を問ふ

マヤスチニアン帝以後は又西洋史に關係する程の事なし此帝國は紀元千四百年代まで存立し帝王は代々コンスタンチノブル都に在りて祖先の版圖を支配するの權あるを主張し先業を回復せんと勉めたることあり



りと雖ども國勢陵夷又如何ともすべからざりき

七十

問題第二十九 耶蘇基督教の起原を問ふ

オーガスタス在位の時に當りて羅馬領猶太國に於て基督なる者生れたり是れ紀元前四年なりき基督は夙に神の子孫と自稱し尤も人民の歸依を得たりしが當時社會は勢力ありたるファリサイ教徒を攻撃したるを以て此等教徒の憎怨を受け遂に十字架の上に磔殺せられたり時に紀元三十二年なりき

問題第三十 耶蘇教徒の虐殺せられたる概況を記せよ

紀元六十四年の頃羅馬帝ネロなる者或事より國民の歡心を得んと欲して耶蘇教徒を捕へ悉く之を死刑に處したり然れども其處刑頗る殘忍なりしより人民は却つて耶蘇を憐むの情を發したりき如此奇禍に遭遇したるにも係らず其教徒は他の教徒を非難して止まざりしを以てダイオ

クレシアン帝の朝其會堂經典は破壊せられユール人ブリットン及びスペインの教徒を除くの外他の地方の同教徒は老少男女の別なく悉く之を虐殺したり

問題第三十一 耶蘇教が隆盛に赴きたる所以を問ふ

スンスタンチン帝屢ば外敵と兵を交ふるの際戦勝を基督の神に祈り大勝を得たりとなし忽ち熱心なる耶蘇信者となり布教のために盡力し基督教を以て國教となし國民をして耶蘇を奉せしめ壯大なる會堂を建築し僧侶には惣べて免税の特典を與へたり是れ耶蘇教が隆盛に赴きたる最大なる原因なり加之此教徒中には博識なる哲學者及び神學者等も續々輩出して人間の信仰に生活に道德に智力に大なる効力を與へたるを以て遂に盛大なる運に遭遇するに至れり

第二編 中世史

七十一



第一章 總論

問題第一 中世期文明の淵源する所を問ふ

羅馬が大國となるに及びて古代諸國の宗教、法律、習慣、言語、文學、技術等總て國內に蒐集し以て之を後代に傳へたり故に羅馬の盛なるるときに在ては太古に於て文明を發達したる東洋諸國は總て其配下に屬して羅馬の社會に文明を置き其滅亡するや近世の諸國其廢墟中に萌芽を發せり近世歐洲諸國の制度國狀の相似たる者は總て法律、習慣、言語、宗教等羅馬の文明を受けたるが故なり

問題第二 中世期を幾何の小世期に分つて見るや

第五世期より第十世期までを暗世といふ即ち日耳曼人が侵入して西羅馬の亡ぶるや舊時の文明は殆ど野蠻人に打破せられたり故に暗世といふなり第十一世期より第十五世期までを曉世といふ即ち文明の曙光

漸く見はれ秩序整然以て第十六世期即ち近世期の文明の曉天をなせばなり

問題第三 中世期に於ける新人種の區別を問ふ

アリアン人は太古亞細亞に住せしが其一派は地中海に沿ふて歐洲に入り太古の文明即ち希臘及び羅馬の文明を開き其一派は亞細亞より歐洲の東北に出で中世期の文明即ちチュートン人の文明を開きたり此一派は第一はケルト人第二は所謂チュートン人第三はスラボラニア人となす

問題第四 ケルト人に就きて其概略を記せよ

ケルト人はブリテン、ヨーロッパ西班牙等の地を占め早く羅馬の文明に化せられたり

問題第五 チュートン人に就きて其概略を記せよ



チュートン人即ち日耳曼人はスカンディナヴィア及び北日耳曼に住し羅馬の化育を受けず性質勇武にして自由を愛し獨立の氣象に富めり此人種又ゴツス、フランクス、アングロサクソンス等に分れ四世紀の終頃より移轉を始めアングロサクソンスはブリテンに入りフランクスはゴールに居を定めエッスの一派なるビシゴツスは西班牙を奪びたり

**問題第六** フラボニア人に就きて其概畧を記せよ

スラボニア人は魯西亞及び波蘭等歐洲東北隅に住し世界の活劇場に顯はれたるは近世のことのみ

**問題第七** 中世期の主人公なるチュートン人の文明は如何なる原素より構成せるや

中世期の歴史はチュートン人の新思想とラテン、ケルツ人の舊文明と相混和するの歴史たるに過ぎず此二元素始めは互に相撥ね相搏ち擾亂

を極めたるが後には遂に混同鎔和して文明の新天地を作り出だせり蓋し近世の文明はチュートン人の特有なる自主自由の精神と羅馬人が貽したる文物制度の二つより化成し來りたりと云ふも決して過言にあらざるなり

**問題第八** フランク王國の起原及び國王の廢興を問ふ

チュートン人の一種なるフランクス人諸種族中最も強大なる者にして其酋長クローピスなるもの紀元後五百七年に都を巴里に定め尋で耶蘇教に改宗せり然るに其子孫皆暗愚にして政を統らせず宰相權を専らにす紀元七百三十二年回教人西班牙よりピレネーヌ山を越ゆる佛國に侵入するに當り宰相チャールスマーテル伐つて之を退け歐洲耶蘇教國をして回教徒の蹂躪を免かれしめたりチャールスの子ペピンに至り遂に有名無實の王を廢し自ら代り立つ其子シャルレマン繼で位に上れり



**問題第九** シアーレマン大帝の人となり及び諸種の征服を記せよ  
 紀元七百六十八年ペピン歿し二子シアーレマン及びチャールス王國を  
 分管せしが幾くもなくシアーレマン卒せりチャールスは後世佛人の所  
 謂シアーレマン大帝即ち是れなりシアーレマンは英武絶倫にしてサク  
 ソン、デーンズ、スレーブ、サラセン、ロンバルド等の諸種族と兵を  
 交へること前後數十回悉く之を征服せり

**問題第十** シアーレマン大帝の政事及び版圖を問ふ

シアーレマン始めはフランクなる一王國の首長たるに過ぎざりしが今  
 や西羅馬の帝位に上り而して其版圖は古代の西羅馬に均く西はエプロ  
 河より東北エルベ河東南タイヌ河に達し以太利の大半及びシ、リ、  
 マルシカの諸島皆其領地となれり皇帝は夙夜孜孜として治蹟に勵み制  
 度文物を改良し又大に教育に注意し文學、技術を奨励保護せり故に一

且敗類したる西羅馬も今復隆盛を致したり然れども此帝國は境域廣大  
 にして其領地には制度、文物、習慣、言語を異にする者ありシアーレマ  
 ンの大才は能く之を統轄するに堪ゆべけれど一旦不肖の支配者を得ば  
 忽ち分裂せんこと殆んど期すべかりしなり

**問題第十一** ペピン及びシアーレマンと羅馬法王との關係并に西羅馬帝  
 國の恢復を問ふ

羅馬法王スチーブンス三世は宗教社會の獨立を維持せんが爲めペピンの  
 歡心を買ひ其の救助を得んと欲しペピンの爲めに即位式を挙げ正當の  
 登祚を人民に示し以て民心を鎮定せりよりて法王はペピンにバトリシ  
 アン即ち羅馬の奉行と云へる官號を與へたり此奉行の實權は殆んど君  
 主に異らざりしと云ふ故にペピンは是時よりフランク王と羅馬奉行と  
 を兼ねたり其子シアーレマンが以太利を一定するに及びて法王テテは



之に帝冠を交付し以て西羅馬の位に即かしめチャールスフーガスタスの尊號を與へたり是に於てか西羅馬帝國は恢復せられ舊羅馬帝國は又東西に分立するにいたれり

問題第十二 シアーレマン帝の再興したる西羅馬の分裂を問ふ

紀元後八百十四年シアーレマン卒し子ルイ位を襲ひしも國內紛亂屢起れり帝は西羅馬帝國をペピン、ロテール、ルイの三子に頒ち與へしが後末子チャールス生れたる故前三子の所領の一部分を削りチャールスに與へんとせり三子大に不平を唱へ兵を擧げて父に反し之を幽閉せり既にしてペピン死し父ルイも亦歿しければ自餘の三子各其所領を争て相鬭ぎ遂に紀元八百四十三年に至りベルマンに於て和約を締盟しロテールは以太利を領して西羅馬の帝號を稱しルイは東フランク即ち日耳曼を領し而してチャールスは西フランク即ち佛蘭西を領することゝな

れり茲に於てかシアーレマンの爲めに一時統一されたる帝國再び三分し以太利、日耳曼、佛蘭西之に代りて起れり

第二章 英吉利史

問題第一 英國の起源を問ふ

英國は始めブリタニアと稱しケルツ人の一派なるブリトン人此に住せしがシイザートの爲めに征服せられ爾後四百餘年間羅馬の半屬國たりしが五世紀の半頃に至りアングロサクソン人侵入し來りて土地を領せり之を現今の英國人の祖先となす之より國中四分五裂戦争止む時なし九世紀の始めウエッセックス王エグバート始めて之を一統せり

問題第二 アルフレッド大王の治世及びノルマンの侵入并に二人種の確執を問ふ

エグバートの孫アルフレッド大王賢明にして久しく英國の憂たりしデ



ン人を破り文化を布き天下静寧なり然れども紀元千十七年に至りデ  
ーン人再び侵入して遂に國を領し尋で千六十六年佛蘭西の北部なるノ  
ルマンデー侯ウキルリヤム部下のノルマン人を率ゐて入寇し全國を  
征服せり之れより政權全くノルマン人の手に歸し官用の言語もノルス  
ンフランス語を用ゐる從來のアンゴサクソン人は全く其奴隸となれり  
然れども彼等亦容易に屈從せず爾後兩人種間の不和久しく止まざりし  
が十三世紀の始めに至り漸く怨を棄て、相一致するの傾を生ぜり

問題第三 英國大憲章の發布を問ふ

英王ジョン暗愚にして外には佛國に在る英國の領地を失ひ内には政治  
宜しきを得ず貴族等不平して紀元千二百十五年王に迫りて憲法を定め  
しむ是即ち有名なる大憲章にして貴族の承諾を経ず擅に金銀を徵集す  
ることを禁じ或は隨意に人民を禁錮し又は處罰することを許さざる等

大に王權を制限し英國自由制度の基礎を置きたり

問題第四 英國民權の發達及び二院制度の創始を問ふ

始め英國には一議會ありしが其議員たるものは貴族及び僧侶のみなり  
しがジョンの子ヘンリー三世の代に至り各區より二名の議員を出し議  
會に列せしむ之れ英國人民が參政の權を得たる始めにして其後議會二  
分して上院下院の區別を生ぜり此時より英國人民の權利は年を追ふて  
伸張せり

問題第五 百年戦争の顛末を問ふ

英國はウキルリヤム王以來佛國內に於て廣大なる領地を有し之が爲め  
英佛兩國間葛藤常に絶えざりしが紀元千三百二十八年に至り佛王チャ  
ールス四世子なくして死し其從弟パロア侯フィリップ位を繼ぐ然るに  
英王エドワード三世はチャールスの甥なるを以て自ら佛王となるべ



さ權ありと主張し兵を率ゐて佛國に入る之より十五世紀の終りに至るまで戦争息まず世之を百年戦争と稱す始め佛國は大敗し殆んど滅亡に及ばんとせしも後次第に勢を回復し遂に英人を國外に逐ひ盡く其の領地を奪へり之れより佛國の勢力頗る増加し十五世紀の始めには歐洲中の最強國となり英國にてはノルマン人もノルマンディー始め佛國にある彼等の根據を失ひ此に至りて百年戦の終を告げたり

**問題第六** 百年戦争は英國民に如何なる影響を及ぼせしか且つ英語の起源を問ふ

百年戦争屢利あらざりしを以てノルマン人は一致團結して偏に英國を愛護するに至り兩人種間の區別全く消滅し言語も亦アングロサクソン語とノルマンフランス語混合し今日の英語を生ずるに至れり

**問題第七** 百年戦争中の二大戦を問ふ

ポアティエーの戦(千三百五十六年)アミアンクールの戦(千四百十五年)是なり

**問題第八** ポアティエーの戦及び兩國何れが勝を制せしや

ポアティエーの戦は英軍大勝を得佛王ジョン擒にせらる越えて三年ブレチニーの條約成り英王は佛王の位を奪はざることを誓ひ其報ひとして佛國內のアクイテーン及びカレーを得たり

**問題第九** アミアンクールの戦及び兩國何れが勝を得たるや

アミアンクールの戦は英軍亦大勝を得たり之より先き佛王チャールス五世ブレチニーの和約を破りアクイテーンの大半を回復せり千四百十五年英王ヘンリー五世佛國の内亂に乗じて入寇シアミアンクールに於て佛軍を撃破せり之より兩國再び干戈を交わしが佛軍常に利あらず次第に土地を失へり



問題第十 薔薇戦争の原因及び其結果を問ふ

薔薇戦争はランガスタ―家とヨーク家との王位の争より起れりブランタセチツト統はリチャルド一世を以て終りランカメタ―家のヘンリ四世王位を得たり此王を隔つること一代ヘンリ六世は紀元千四百二十二年を以て位に即きしが此時ヨーク公リチャルドと云ふ者あり正當に王位を受くべき権利ありと主張し兵を擧ぐ此を稱して薔薇戦争と云ふヨーク軍は白薔薇ランガスタ―軍は紅薔薇の徽章を用ひたればなり此戦争は紀元千四百五十五年に初まり同千四百八十五年迄前後三十年間繼續し英國の貴族は之が爲めに家系殆んど斷絶し盡したりと云へり而して其の結局はヨーク軍勝を得紀元千四百六十一年リチャルドの子エドハルド四世位を占めたり

第三章 西班牙史

問題第一 亞刺伯人西班牙征服及びムール國の興廢を問ふ

第八世期の初アラビア人がビヨコツス人が建國したる西班牙半島を征服するやこのムール國を創立して回教を布き耶蘇教を撲滅せり然れどもムール國建立後未だ久からずして西ゴース人次第に勢力を得てアラビア人を放逐して其舊國スペインを復興せり

問題第二 西班牙國の分裂を記せよ

亞刺伯人が西エース人に驅逐せられたる後は耶蘇教國漸々西班牙半島に起り十三世期に至りては葡萄牙、アラゴン、カスチール、ナバルの四王國に分れ殊にカスチール及びアラゴン二王國の如きは國會を保持して民に参政權を與へたり

問題第三 西班牙の一統を記せよ

紀元一千四百六十九年カスチール王フェルナナンドがアラゴンの女王



イサベラと婚し二國を合併して西班牙王國を建て千五百十二年ナバル王國を合併し西班牙全國を一統して勢力強大一時歐洲中の最強國たるを得るに至れり

問題第四 葡萄牙の建國を問ふ

葡萄牙は西班牙半島の西端にある一小國なり此國十三世期西班牙國分裂の時始めて葡萄牙王國を創立し西班牙一統の節も之に合同して依然一の獨立國を維持せり

問題第五 亞米利加の發見を問ふ

紀元千四百九十二年イサベラ女王の補助を得てコロンブス亞米利加を發見したり是を以て亞米利加は西班牙國の領地となり國勢愈強大に赴けり

第四章 蒙古人の侵入及び欽察王國

問題第一 蒙古人の露西亞侵入を問ふ

紀元十三世紀の初め韃靼即ち蒙古の酋長鐵木真中央亞細亞を攻服し進みて露西亞の東南部に侵入しボロツナイ(欽察)を討つボロツナイ救を露國の諸侯に求む露國の諸侯此れと聯合しアツフ海附近に於て蒙古の軍を討ちて大敗せり鐵木真死して後其子太宗諸將を遣し再び露國に侵入せり露國の諸侯は相聯合するの暇なく蒙古の軍は至る所都府を灰燼にし人民を捕へて或は殺し或は奴隸とせり露國の諸侯は走りてポーランド地方に逃るゝに至れり

問題第二 蒙古人獨乙の侵入及び歐洲東部恐慌を問ふ

露國の諸侯がポーランド地方に逃れ急を告ぐるや東歐諸國は非常なる恐慌を生じ羅馬法王グレゴリウス九世は耶蘇教國の義勇軍を募り佛國王ルイ九世は十字軍を整へんとし獨乙皇帝は檄文を歐洲諸國に飛して



歐洲の危急此一舉に決するを以てせり如此なるにも係らず蒙古軍は露國より進んでポーランド地方を荒し尙進撃して止まず到る所白人を殺掠して終に獨乙に侵入し歐洲列國は計の出づる所を知らず幸にして太宗本國に於て殂したるを以て蒙軍は一時引き揚ぐるに至れり

問題第三 欽察王國及び露國が蒙古人に司配せられたる年數を問ふ

蒙古の將拔都は歸路ゾオルガ河畔に到りて露國を平定し欽察國を此地に建設し以て蒙古の威勢を逞うせり其後二百年間魯國は其壓制政事を受け十六世期に至りて初めて獨立することを得たり

### 第五章 亞刺伯史

問題第一 亞刺伯人種及び此の國の勃興したる所以を問ふ

亞刺伯人はセミチック派に屬し夙に文化頗る發達せしが紀元五百七十年マホメットなる者出でて此の國を勃興せりマホメットは所謂回教の

始祖にして其教徒の勢猖獗にして諸國を攻服し當時全歐洲を占領したるアリアン人種間に迄侵入し大に猛威を逞うしたり

問題第二 マホメットの略傳及び回々教の教旨の他の宗教との大に相違せる點を問ふ

マホメットは紀元五百七十年の頃亞刺伯のメッカに生れたり年少の時には商業に従事せしが四十歳の頃に至り深山に退隱し遂に自ら公言して曰く上帝は亞刺伯の宗教習慣を改良せんことを己れに命じたりと則ち刻苦して其教旨を擴布するを力め數年の後に至り亞刺伯に在る諸人種を征服し呼んで曰く新宗教は劍戟の力にて全世界に強ゆべしと則ち大に其宗旨を國外に擴張せんとせしが偶々熱病に罹り紀元六百三十二年メデナ府にて歿せり

問題第三 亞刺比亞人の東洋諸國征服の狀況を記せよ



マホメットの繼嗣をキヤリフと云ふ第一のキヤリフはアビエベケルと云ふ者にしてマホメットの遺志を次ぎ諸國に進入す向ふ所敵なく僅々數十年の間にシリア、メソポタミア、印度、波斯亞、埃及及び其他亞非利加海岸皆サラセンの版圖となり回教一般に流行し東羅馬も亦尙にコンスタンチノーブルの城内に餘運を保持するを得たるのみ

問題第四 亞刺伯人の歐洲征服を問ふ

亞刺伯人は歐洲に侵入するや西班牙を征服し進んで全歐を征服せんと欲せしがフランク王チャールルスに破られ其梟志を達すること能はず然れども西班牙は實に七百余年間亞刺伯人の支配を受けたり

問題第五 亞刺伯人の版圖及び其覆滅を記せよ

亞刺伯人は諸國を征服して建てたるの帝國は疆域廣大にして亞細亞の西南亞弗利加の北部及び西班牙半島に亘りたり其後内亂頻りに起り其

領土を失ひ遂に十一世紀の頃に至りて土耳其人のために覆滅せらる

第六章 日耳曼史

問題第一 カロピンジャン王統の廢絶及び日耳曼分裂の狀を問ふ

シアールマン帝國が日耳曼、佛國、伊太利の三國に分立したる當初日耳曼はルイ王之を統轄せしが王の晩年に及びてサクソン侯フランコニア侯パハリア侯スワビア侯の五大諸侯大に威力を振ひルイ四世の崩後五大諸侯各獨立して一國をなし五國會議の末王統を廢するに至れり

問題第二 日耳曼に於ける撰學王の起原及び其撰學せられたるは誰なるや

日耳曼が五大諸侯國に分裂せられ王統を廢してより後は一の新制度を設け諸侯會議を設けて日耳曼王を撰學することに定めたり最初王に撰學せられたるはフランコニア公コンラッドとなす是れ日耳曼王コンラ



ツド一世なり之より撰學王國となれり時に紀元九百十一年なりき

**問題第三** オット一世の雄圖及び神聖羅馬帝國の建立を問ふ

サキソン王統のオット一世は位に即きし後近隣の蠻族を討ち威光を耀し且つ當時以太利には一定の國王なく擾亂絶ゆるがかりしかばオットは此機に乗じ伊太利を征服して其王となり羅馬法王は寺院保護者として紀元九百六十二年羅馬府に於て帝冠を捧げオットを尊稱して神聖羅馬皇帝と宣言したり是れ獨乙神聖羅馬帝國の起原にして爾來此名稱は十九世の初に至るまで依然其痕跡を残したり

**問題第四** 西羅馬帝國の再建及び日耳曼王と伊太利王及び西羅馬帝との關係を問ふ

オット一世羅馬法王の加冠に依り神聖羅馬皇帝の尊號を受けたるを以て從來廢絶したる西羅馬帝國はこゝに復興するに至れり爾來日耳曼王

たる者は以太利王及び西羅馬帝國を兼ねることゝ定めり

**問題第五** フレデリック二世の權勢及び其治世を問ふ

ホーフエンストウフェン統のヘンリー六世シ、リア王國を征服して日耳曼の領地となしたるを以て其子フレデリック二世は日耳曼、伊太利、シ、リー王の位を兼ね西羅馬皇帝の位に即けり此王は聰明にして才學共に秀で其在位の間は國內太平文運隆盛に赴けり

**問題第六** 諸侯の跋扈及び埃太利家の即位を問ふ

十三世紀以後日耳曼國は諸侯の勢力強大となりて王命を奉せず國內四分五裂戰爭止む時なく民力靡弊して文明更に進歩せず十五世紀の初に至り人心亂に厭さ或強大なる諸侯を撰びて帝となし以て爭亂を鎮壓し平和を維持せんと欲し埃太利家のアルバート二世を擧げて帝位に即かしむ之より三百余年間帝位は埃太利家の專有物となれり



**問題第七** 神聖羅馬皇帝權及び日耳曼王權の衰弱を問ふ  
埃太利家に至りては伊太利を放棄したるを以て獨り神聖羅馬皇帝の實  
權なきのみならず日耳曼王の權力も亦次第に衰退せり

### 第七章 佛蘭西史

**問題第一** カロピンシアン王統及びカベシアンの興廢を問ふ  
ベルタンの和約より佛蘭西は一時カロピンシアン王統を以て支配し  
たれども世々の國王暗弱にして國家治まらず遂に紀元九百八十六年ル  
イ五世の卒するに及で王統全く廢絶シフランシア公ユーカベ王位を篡  
奪してカベシアン王朝を立てり

**問題第二** ノルマン人の來襲及び英、佛葛藤の起原を問ふ  
カロピンシアン統の時代に當リスカンヤナピア地方に蠻族あり稱して  
ノルスマン即ち北人と云ふ海賊を以て業となし歐洲北部の海岸を鹵掠

し勢甚だ猖獗なり紀元九百一年其酋長ロロ佛國の内地紛亂せるに乗  
じ族人を率ゐ來てセーヌ河畔の地を侵し其勢富るべからず佛王チャ  
ルス一州を分て之と與ふ是を稱してノルマンヤと云ふ後世英、佛二  
國間の交渉の源を爲せる者なり

**問題第三** 佛國のノルマンディー公英國王の位を得しより佛國の王權に至  
大の關係を及ぼしたるを問ふ

カベシアン王統はフレデリック二世までは王權衰微し諸侯跋扈し殊に  
ノルマンヤー公ウイリアムは千六十六年英國を征服して其王位に上り  
しが故に佛國に在つては一諸侯には相違なきも其威力の強大なるは兎  
角佛王を凌駕せんと欲するの勢あり且つ英國ヘンリー二世即位の後佛  
王ルイ七世の先后エリンノルを容れて妃となせしよりエリンノルの領  
地は悉く英王の所有に歸し佛國中の英領は佛王の領地よりも却つて大



なるに至れり

**問題第四** フィリップ二世の王權擴張及びブウピンに於ける佛軍と連合軍との戦を記せよ

フィリップ二世即位の後漸く王家の勢力を回復せしが獨り英王の跋扈制し難きに苦み陰に其機會の至るを待ちしに英王ジョン惡意を恣にし其甥なる佛國ブリタニー侯アーサーを殺害したるを以てフィリップは之を奇貨とし英王は佛國諸侯たるの資格あるを以て之を佛國の朝廷に召喚して其罪を辨明せしめんとせり然るにジョン其命に應せざりければフィリップ宣言して曰く英王が佛國に采地を有するの權は既に絶滅せりと英佛の戦之れより起りフィリップは戦争によりてノルマンギ一を始めとしアンヌヌウ、メイン、ツアーレン等の諸州を英王より奪ひて大に前代の屈辱を雪げり斯くてフィリップの勢力強大に至りしがた

めに四隣皆驚き英と連合して抵抗を試みしが紀元千二百十四年ブウピンの一戦に於て佛人大勝を得たり

**問題第五** ルイ九世の君徳及び其善政を記せよ

ルイ九世は性質温良にして而かも果斷の風に乏しからず人にて聖人と云ふ紀元千二百二十六年王位に登り政治を改良し國本を固うせり又パリの大法院を作り全國を通じて法律の齊一を維持せしめたり故に諸侯の暴横全く跡を歛め人民の幸福漸く増加し國威を發揚し歐洲にて高等の地位を占むるに至れり

**問題第六** フィリップ四世と法王との葛藤を記せよ

フィリップ四世法王ホニフェース三世と紛争を起し其身に勢力を得んがために始めて國會を招集せり此國會は貴族僧侶及び平民の三種各議士を出して政事に參與せしむるものたり斯くて多年紛争の後法王の居



都は佛國アピノンの地に遷され新立の法王クレメント五世は全く佛王の臣屬となるに至れり

問題第七 百年戦争後佛國の隆盛を記せよ

百年戦争後ルイ第十一世の時代には中央集權の制度其勢を得て封建の餘習大に衰へたり王善く國を治め溝渠を開き製造を盛にし教育を務め内政を整頓せしかば佛蘭西の國威は海外に輝くに至れり

第八章 羅馬法王

問題第一 法王權の發達を問ふ

西羅馬帝國の亡ふるや羅馬の大僧正は曾て全世界を支配したる都府に於て最高最貴の人として自ら世人の尊敬を受けたり之をポープと云ふポープとは尊父との同意なり六世紀に至りロムバード人以太利の北部を占領し羅馬を侵すこと數々なりペヒン及びビシャーレマン來りて法王

を助けロムバード人の領地を削り之を法王に與ふ是れより法王の權力漸次に増加し管に宗教上のみならず政治上にも干渉するに至れり

問題第二 法王と日帝との葛藤及び日帝の屈從を問ふ

十世紀の半頃より以太利は日耳曼帝の領地となれり然れども人民之に服せず法王を擁して皇帝に背かんことを謀れり加之ならず皇帝は政教共に主權を有するものにして其認可を経ざれば法王となる能はずと主張し之が爲め紛紜常に絶えず紀元千七百十三年グレゴリー七世法王となるに及び日耳曼帝ヘンリー四世を破門せりヘンリー大に怒り法王に向て戰を試みんとせしも人民命を奉せず反亂四方に起りしを以て紀元千七百七十七年一月親ら法王の門に詣りて罪を謝し至尊の身を以て單衣跣足外庭に立つこと三日僅に赦免を得たり是れより法王の權力頗る盛にして葡萄牙アラゴン英吉利サレディニア、シシリー等の王皆法王を尊びて



自ら臣と稱せり

**問題第三** 法王と希臘教會との軋轢を生じたる顛末を問ふ（希臘教羅馬教の分立）

コンスタンチノール教長即ち所謂希臘教會長は東馬羅の威權を主張して羅馬法王の上に在りて常に宗教の權力を專にせんと欲し羅馬法王は之を戴くを肯せざりしを以て法王の教長たる羅馬教會と希臘教會とは常に軋轢の絶ゆることなく其利害を異にし教理教規も亦差別を生じ是に至つて希臘教羅馬教とは別派無關係の宗教となるに至れり

**問題第四** 法王權の衰退を問ふ

クレヨリー七世（羅馬法王）が日耳曼皇帝ヘンリー四世を屈服せしめしより法王權は愈々強大となり以後の各法王は驕恣にして私欲を逞くし爲に帝王の反抗に遇ひ法王權漸く衰退に赴かんとするにも係らず僧侶

等の品行は日に月に腐敗し千四百年代に至りては耶穌教々義の非理と法王の不法とを攻撃するもの日に月に多く法王の權力は之と共に衰退するに至れり

### 第九章 土耳其史

**問題第一** 土耳其即ちオットマン帝國の勃興を問ふ

土耳其人は回教徒にして亞細亞の西部に在りしが第十一世紀の頃バグダットを陥れて亞刺伯帝國を滅し又セルサレムを攻めて己れの領下に歸し漸く勢力を是等の地方に得たり第十三世紀の後年に當りファットマンなる者あり小亞細亞中の一州を領し之を子孫に傳へしが爾來此ファットマンの帝國は漸く隆盛と爲り大に其領地を擴め遂に東羅馬の領地を蠶食するに至れり

**問題第二** 土耳其帝國東羅馬併呑したる始終及び其激戦を問ふ



第十五世紀の前半マホメット二世オットマンの帝位に在り東羅馬の衰  
 状を見之を陥れんと欲し紀元千四百五十三年兵を率てコンスタンチノ  
 ーブルを圍む羅馬帝ユンスタンチンバリチロガス之を防ぎ激戦五十三  
 日遂に城陥り羅馬帝亦戦死す東羅馬帝國茲に於て亡びコンスタンチノ  
 ーブル土耳其に歸し而して土耳其の國勢は之より益盛なり

## 第十章 十字軍

### 問題第一 十字軍の起原を問ふ

中古歐洲の耶蘇教徒は巡禮として多くパレスタインに赴き救世主の墳  
 墓に參詣せり然るに第十一世紀の中頃土耳其人此地方を略せしより禮  
 拜者を苦め侮辱を加ふること甚しかりければ其風説早くも歐洲に傳播  
 し人々安さ心はなかりけり時にヒーターなる僧あり親くゼリユサレム  
 に赴きて其實況を目撃し憤懣に堪へざりしかば歐洲に歸り弊衣裸頭瘦

驢に跨りて伊太利佛蘭西を遍歴し到る處巡拜者の慘狀を語り一日も早  
 く邪教人を征討せざるべからざることを説きしかば人心忽ち激昂し衆  
 人争ふて遠征軍に加はれり彼等は皆肩に十字の記號を付し其意を表せ  
 り是れ十字軍の其名を得たる所以なり

### 問題第二 第一十字軍及び其結果を問ふ

第一十字軍は兩回に分ちて之を見る第一回は紀元千九十六年に赴けり  
 男女総勢三十余万人ウラルター擧げられて大將となりヒトタア推れて  
 軍師となりしが元と是れ烏合の衆なるを以て未だエルサレムに達せざ  
 る以前に敵軍に破られて逃げ歸れり第二回は諸國の總軍勢五十万フー  
 ロン公ゴドフレ―之を率う小亞細亞を通じて進撃す苦戦數次靈地に近  
 きたる頃には僅かに二万人を餘すのみ然れども靈地を占領し土耳其人  
 を殺すこと數万人こゝに基督國を建てゴドフレ―公靈地保護者の稱號



を受け其親族之を承け子孫世々此地を支配せしが一千八百八十七年に至り埃及王に滅せらる

問題第三 第二十字軍及び其結果を問ふ

第二十字軍は千四百四十七年より同く四十九年に至る當時土耳其の勢強くして顯地の存立甚危急に頼せしが日耳曼のコンラント三世佛蘭西のルイ第七世兵三十万を率ゐて進撃せり然るに東羅馬帝は日耳曼と和せざるのみならず日耳曼兵は十に七八土耳其人に殺され佛軍次いで至るに及びて相合してエルサレムに進みタマスカを圍みたれども毎戦功なくして歸歐せり

問題第四 第三十字軍及び其結果を問ふ

第三十字軍は千八百八十九年より同く九十二年に至る十字軍中最も有名なる者にして土耳其軍にはサラディンなる豪傑あり十字軍には英王リ

チード佛王フィリップ曼帝にはフレデリックバーバロッサの三英主ありたれども英王佛王相善からず佛王は中途にして歸國し英王獨り進んでエルサレムの近傍に至りて忽ち歸途に就き日耳曼帝は溺れたるを以て此役は遂に無効となれり

問題第五 十字軍の結局を問ふ

十字軍起りしより千二百七十年まで前後八回の多きに及びたれども第四次以後は記するに足る者なく唯エルサレムは遂に土耳其人の手に歸したるに任し又之を回復する能はざるに畢れり

問題第六 十字軍より生じたる間接なる種々の好結果を問ふ

第一歐洲諸國の人民が一般に協力して戦ひたるを以て相互相知り相親み自然に同感の情を強くしたり第二東洋の風土物産等を見て智識を増し商業を盛にし殊にフロレンス及びゼノア等の府民が運漕貿易に従事



し殷富を致したり第三諸侯は土地を人民に賣り或は自由を與へて以て軍費を調へたるを以て十字軍收結の後諸侯の勢力衰へ封建制度廢頽したり第四十字軍以前には異教人をば蛇蝎視したるも之に交るに及び其性質風俗感賞すべき者少からざるを知り思想を廣くし胸襟を快にしたり第五義騎制度の發達を致したり以上五件は實に十字軍より生じたる間接なる幸福といふべし

### 第十一章 封建制度

#### 問題第一 封建制度の起原を問ふ

テニートン 人が歐洲を攻め取りたるの後其得たる所の土地を以て己が部下に分與したり之を受たる者は確乎たる所有權を有し酋長と雖ども容易に之を奪ふことを得ず而して又納税及び兵役に服するの義務を負はず且の酋長及び其部下は己等が得たる所の土地を其寵臣若しくは征

服されたる土民に與へ其報酬として彼等を臣隸とし租を納め戰時には又兵士とならしむ故に之を受けたる者も賣買讓與の權なく又主人の意によりて何時沒收さるゝも亦如何ともする能はざるなり之を封建制度の始めとす

#### 問題第二 封建制度の發達を問ふ

封建制度の起りし後年を経るに従ひ小諸侯は皆他諸侯の侵略を恐れて大諸侯に臣となりフーフとして其土地を保つに安全なるを計り大諸侯も亦同様にして遂に一君の下に隸屬するに至れり十一世紀の頃には諸侯皆堅固なる城郭を構は擅に人民を壓制し其狀恰も獨立の君主の如し實に封建制度の充分發達したる時なり

#### 問題第三 封建制度の衰たる原因を問ふ

封建制度は武備を盛にし外敵を防ぐには多少の効力ありしも其弊害の



極まる處大に人民を害し且つ群雄處々に割據して干戈を交ふるを以て一國の結合と平和とを妨げたること亦決して少なからず後次第に衰へ十五世紀の終りに至りては殆んど全く滅絶せり今其原因を尋ぬるに左の如くなるを見る

第一、王權次第に増加せしこと

第二、自治都邑の勢力を得て貴族の専横を抑制せること

第三、僧侶の帝王に與して諸侯に反對せしこと

第四、十字軍の爲めに諸侯産を破り力を醫せしこと

### 第十二章 義騎制度

問題第一 義騎制度の興廢及び其利害を問ふ

義騎制度は元來名譽を貴び婦女を愛敬する處のテュートン人特性に基きたるものなり封建一世天下大に亂れ老若婦女等特に不幸を受くるを

見て義俠の士之を憐み強を挫き弱を助けるを以て務となし馬上にて諸方を遊歴せり十字軍の時には最も盛にして數個の團躰をなし彼等をナイトと稱せり當時の士公は其臣下の子弟の爲に校舎を城中に設け武藝を講習せしめ丁年の後に至りて始めてナイトとなるを得るなり此位を得るものは皆神を敬し婦人を尊び正義を守り偽りを語らざることを盟へり後封建制度衰へ殊に火藥の發明以來戦争の風一變し猛將勇卒も其力を用ふる所なきに至り此制度も亦全く廢絶せりナイト中には勇を恃み社會を害せし者少なからざりしも一般より論ずる時は此くの如き亂世には其益亦多かりしならん

### 第十三章 中世紀の文明

問題第一 中世紀の文明に於ける僧侶の功勞を記せよ

闇世に於ては野蠻人跋扈し羅馬の文明も殆んど跡を滅せり此際に於て



僧侶のみは多少の學識を具へ平和の先導者として常に諸侯の專横を抑へ人民の自由を保護せり實に彼等は古代の文明と近世の文明とを連接せる一條の橋梁にして其下には奔湍激流あるにも關せず能く古代の文明を後世に傳へたり

**問題第二** 中世期に於ける万有學の進歩は如何

當時の學問は唯形而上の事のみにして荒誕無稽の説なりしも十三世紀に至りロージャー、ペーコン、アルバートゥス、アグヌスの如き學者出で之より理化學漸く起れり

**問題第三** 中世期に於て文明を普及せしめたる二原素を問ふ

往昔の歐洲にて書物の材料に用ひたるは埃及に生ずるパピルス（葦蘆の一種にしてナイル河畔に多し英語のペーパーは之れより轉訛せるなり）の葉なりしが八世紀の頃回教人埃及を征服してパピルスの輸出を

禁じたるより已むを得ず鹿皮等を用ひたり是を以て書物の價極めて貴く普通人民の資力にては到底之を購求する能はざりしが此時に至りて始めて弊布より紙を製することを發明し尋で又印刷術も開けたれば書物の價隨つて減じ學問の補及を助けたること少なからず要するに十一世紀後には歐洲の文化再興し來り近世文明の基を作りたるなり

**問題第四** 中世期に於ける亞刺伯文明の概況を記せよ

中世紀の間歐洲諸國の暗世時代に際し亞刺伯人は獨り文明の光輝を放ち學者の輩四方より輻輳し廣大の文庫處々に起りカイロー府にあるものは十萬卷の書物を有し其屬領たる西班牙にあるものは六十萬卷の書物を藏したり全体亞刺伯人は粗暴過激の人民なりしにも拘らず夙に優美の風に向ひ後に至りてはコルドハ及びバクダットの兩府の如きは華麗を競ひ文學を争ひ共に政治宗教の美を此所に集め殊にバクダットの



如きは詩人學者の淵藪と稱せらるゝに至りコルドハの回教寺院及びアルハンブラ宮殿の遺蹟は後人をして當時如何に文明が進み居りしかを相像せしむるに足れり

### 第三編 近世史

#### 第一章 總論

問題第一 近世期に於ける王權の發達を問ふ

封建の時代に在ては政權悉く地方の貴族に歸し王權萎微したりしが此制度の衰頹するや忽ち反動を生じ政權全く國王に歸し各國共々專制君主を出すに至れり從來地方に散布したる政權を取りて之を中央の君主に歸し以て國家の統一を圖りたる結果專制君主を出すこと免る可からざる數なればなり

問題第二 近世期に於て常備軍が君主の專制政事の一大要素となりしを問ふ

封建時代に在て國王軍兵を要することあらば之を貴族より徵集すること故貴族若し出兵を拒めば國王は又軍兵を得るの途なかりしなり是を以て國王の權力は極めて微弱なりしものなり然れども中世紀の末葉より以來各國の國王は盡く常備軍を養へり此の常備軍は一團の軍兵にして平常軍事を練習し一號令あれば忽ち戰場に出るを得其精銳封建時代の軍兵の比にあらず而して國王は已れ自ら給して此の軍を有せし故に自家の爲めに之を用役し貴族を壓し人民を制し以て己の專權を逞うすることを得たり

問題第三 近世期の初に於て自由制度の發達せりさりし以所を問ふ  
王權強大に赴くや之に代て人民の政治上の自由は却て縮少せり蓋し中



世紀の半より以太利、日耳曼及び其他の各地方には自由市府なるもの存立し是等は能く封建社會の間に立ち自由制度を保持し夙より自由制度を施行したり然るに君主專制の出づるに及で是等の君主は自由制度を敵視し盡く之を覆滅せんことを企て殊に各國人民は偏に國家と君主とを同一に視し君主を救くるを以て國家に盡くすの義務と心得たる程なりし故に專制君主は愈勢力を得中世紀の自由制度は近世紀の初めに於て盡く其足下蹂躪せらるゝに至れり

## 第二章 世界の一新

問題第一 十五世紀後半に至りて世界を一新したる三大要素を挙げよ  
第十五世紀の後半は實に中世紀の世界を一新し近世の世界を生出したる時期にして歴史上甚だ重要な事蹟を有す羅針盤、印刷器及び火藥の發明是なり此三大發明は人間舊來の思想を一變し世運進歩の新路を啓

きし者にして現時の文明が着歩したる源始なりとす

## 問題第二 印度洋航海發見後亞細亞歐羅巴間の商業及結果如何

舊世界即ち中世紀に於て歐洲人民に知られたる土地は歐羅巴と西部亞細亞及び亞非利加の北岸のみにして而して人々は世界を平面の土地と相像したりしなり然るに羅針盤の發明ありてより遠洋航海行はれ全地球を回航せるものもあり人々も漸く地球の圓體なるを悟るに至れり殊に葡萄牙の航海者は皇子ヘンリー及びジョン二世の保護を受け亞非利加の西岸に沿ふて漸次に南下し遂に千四百八十七年ディアズなる者亞非利加の南端を回航せりジョン王是に於て海路印度に通航し得べき望あるを見此南端を名けて喜望岬角と云ふ好望の名果して空からず後十年を経バスコダガスなる者印度洋を横切りて印度に到着せり之れより西部歐洲の國民は競て此回航貿易を爲し葡萄牙のリスボン府の如き



は東洋貿易の中心たるに至れり

問題第三

コロンブス亞米利加發見の始終を記せよ

ゼノアの人コロンブス以爲らく地球は固と球狀なるべければ若し西方に向ひ航海せんには必ず印度に達すべしと是に於て歐洲諸國の王公を説き其助けを求めたれども一人として之を信するものなく空しく狂人視せられたるが幸にして西班牙の女王イサベラの扶を得て紀元千四百九十四年西印度に航し亞米利加大陸を發見したり此くの如くして海上貿易は是迄殆ど地中海中に限られたるも此頃より大西洋、印度洋等に廣がるに至れり且つ其他の歐洲諸國も争ふて利益を分たんと欲し英、佛、蘭、等皆船を亞米利加或は印度、南洋等に送り土地を拓き殖民をなし或は單に貿易に従事せり是れより歐洲の貿易事業全く一變し彼等が夢にだも想像し能はざりし地方新に世界の歴史に上るに至れり

問題第四

始めて全地球を一周したるものは何人なるや

始めて全地球を一周したるものはマゼランの船なりマゼランは亞米利加極南海峽を経てヒリピン島に至りしが不幸にして土人の殺す所となり然るにマゼランの一船は尙ほ進航を企て遂に地球を一週するに至れり時に紀元千五百二十一年なり

第三章 宗教改革

問題第一

宗教改革の原因を問ふ

チャールズ五世の時代に當り日耳曼國中に紛亂を起したるを宗教改革の葛藤とす蓋し宗教改革は十六世紀以來百余年間歐洲一般に行はれしが其淵源は全く日耳曼に在り今其改革の起りたる原因を尋ぬるに當時歐洲各國は皆耶蘇教を奉じたれども其教義は漸く腐敗し法皇は教權を假り私慾を逞らし僧侶は無學不識にして品行修まらず於是乎耶蘇教に



異議を容る者諸國に勃興し而して今や人民の智識も大に進歩し耶蘇教の腐敗を覺り法王が政治上に干渉するの非理なること及び僧侶の非行を噴々し宗教改革説に左袒する者日に多きに至れり

**問題第二** マルチンルーテル(宗教改革の先導者)略傳及び其主義を問ふ  
 マルチンルーテルは紀元千四百八十三年を以てサクソニーに生る稟性快活剛毅才學に富む壯にしてラーガスチン派の僧侶と爲り次でウィッテンブルグ大學の講師たり夙に耶蘇教義の非理に流れたるを憂ひしが紀元千五百十七年ドミニカン派の僧テツェルなる者インダルセンスを賣る爲めサクソニーに至るインダルセンスは法皇より爲したる赦罪狀にして之を買ふ者は現在の罪惡を償ひ得ると云ひ傲せし者なりルーテル乃ち此機に乗じ奮然起てインダルセンスの不法にして耶蘇教元來の教義に戻るを説き耶蘇教現時の弊惡を擧げ其改革せざるべからざるこ

とを唱遣せり

**問題第三** ヴォームス會議にルーテルを召喚したる顛末を問ふ

紀元千五百二十一年チャールス五世ヴォームスに於て會議を開きルーテルを召喚して其説を取消さしむルーテル之を肯せず侃然として曰く苟も良心の命に従ふより安全にして且つ得策なるはなし余は斷乎として余が説を持す神明を助けんと此時チールスはルーテルを法に處せずして却て衛護兵を與へ其の家に歸ることを得せしめたり然れどもルーテルの主義に與することを嚴禁せり

**問題第四** 耶蘇の新教をプロテスタント稱するの所以を問ふ

紀元千五百二十九年チャールス諸侯を召集し國會をスパイルスに開き宗教上の事を議す會する者多くは耶蘇舊教に與する者なり故に此國會は命令を發して堅く宗教を變革することを禁せしが改革を主唱する徒



黨は相連合して此命令に反抗せりプロテスタント即ち耶蘇新教の利益に始まるプロテスタントとは反抗者の意義なればなり

**問題第五** 新教徒即ちルーテルの徒が其主義を實行するを得たる事情を問ふ

爾來新教の勢力は日に増加し其教徒は相同盟してサクソニー公を主領とし舊教に當り而して貴族公子の此に黨する者甚だ多し元來チャールスは新教を好まず常に之を撲滅せんと欲したれども即位以來佛國との戦争并に土耳其人の防禦にのみ力を用ひ新教を顧みるに遑あらざりしが紀元千四百四十四年クレスビーの條約にて佛國との和議成り又國外に大なる患なしチャールス即ち兵を以て新教同盟に當る初めの程は勝利ありたれども新教同盟の勢力は日に加はりて紀元千五百五十二年チャールスは遂に新教同盟と條約を結び日耳曼國內に信仰の自由を許す

ことゝ爲れり

**問題第六**

奥國に於ける宗教戦争を問ふ並に三十年戦争の發端を述べよ

ボヘミア及びハンガリーの二州は奥太利家の私領なり然れども此二州は新教の勢力盛大なる地なるに奥太利家即ち日耳曼帝は二州の新教徒を壓服せんことを勉めたり紀元千六百十八年ボヘミア人民は遂に反旗を揚げ翌年日耳曼帝歿し奥太利公ラヂナンド三世入て位を襲ぐに及で斷然奥太利家を拒絶しハラチ子の選挙侯フレデリック五世を迎へ立てボヘミア王と爲せり然れども一戦兵敗れてフレデリックはボヘミアを追放せられ併てハラチ子の領地を失ふに及べり之を三十年戦争の初期となす

**問題第七**

ボヘミア新教徒等の屠殺せられたる顛末を記せよ

ボヘミアの亂後噠馬王クリスチャン四世日耳曼の新教徒を助けフレデ



リックをバラチチに恢復せしめんと欲し紀元千六百廿五年兵を率て日耳曼に入るウレンスタイン日耳曼軍に將として討て之を敗る噠馬王逃れ還る時に紀元千六百廿九年なり日耳曼帝乃ちボヘミアの新教徒を屠殺し茲に舊教を恢復す

問題第八 日耳曼と瑞典と宗教上の戦争及び其勝敗を問ふ

瑞典王ガスタバスアドルフは新教の信者なるを以て日耳曼の新教徒に對する處置を憤り且つ其の威名の赫々たるを忌み紀元千六百三十年兵を率て日耳曼に侵入す英國チザランド等の新徒之に應援し佛國の宰相リセリエーも身舊教信者なるに係らず奧太利家の威名を制せんが爲め亦ガスタバスを助けり日耳曼軍悉く敗走しガスタバス到る所に功を奏せり而して紀元千六百三十二年ルチエンの大戦争に於てガスタバヌ戰死したれども日耳曼軍は大に敗れたり

問題第九 宗教戦争が政事上の葛藤と變じたるの事情即ち三十年戦争の收結を問ふ

紀元千六百三十七年フェルヤナンド二世歿し同三世即位す在位二十年其の前半十一年間は戦争尙は繼續して止まざりしと雖ども此等は戦争の性質一變し宗教の葛藤よりは寧ろ政治上の葛藤と爲り佛王は瑞典女王クリスチナと結び以て日耳曼に當れり故に國內の新教徒も今は日耳曼帝を助くるに至りしと云ふ然れども日耳曼軍全敗し紀元千六百四十八年日耳曼帝は諸國とウエストファリアに不利なる條約を結ぶことゝなれりボヘミア人が反旗を揚てより戦争斷續すること茲に三十年故に三十年戦争と稱す

問題第十 三十年戦争後關係ありし諸國の状態を問ふ

三十年戦争の終局即ちウエストファリア條約は歴史上重大なる事件なり



日耳曼帝國は新教徒に宗教上の自由を興へたるも國內の分裂は愈よ甚しく且つ常に戰場の中心たりしを以て全國到る所兵馬の蹂躪する所となり民力靡弊し文明衰退し其後二百余年間は此損害を償ふこと能はざりき之に反して佛蘭西、瑞典兩國は各其領地を廣め瑞西、和蘭兩國は此時より獨立することなれり

問題第十一

佛國の宗教戦争セントバーソロミューの虐殺を問ふ

佛蘭西にてはジョンカルザインなるもの宗教改革を主張しルーテルよりは一層新奇なる説を唱へたり是れより内亂常に絶えずチャールス九世位に上り暗弱なりしを以て實權は全く太后カザリン及び弟ヘンリーの手に落ちたり王之を不満とし竊に新教の諸侯に謀り彼等を退け自ら政權を握らんと欲す太后之を聞き其徒黨と謀り紀元千五百七十二年八月二十三日の夜不意に巴里に在る新教徒の家を襲ひて一萬餘人を殺せり

り之をセントバーソロミューの虐殺と稱す此虐殺は尋で全國に廣がり新教徒の之に死するもの四萬餘人の多きに及び是より國中益亂れ戦争絶ゆること十八年ブルボン家のヘンリー四世位に即くに及び宗教の自由を許し内亂始めて一定せり王賢明にして租税を軽くし農工商の衰頹を挽回せり

第四章 英吉利史

問題第一

ヘンリー八世の私徳と公德とを問ふ

ヘンリー八世はヘンリー七世の子にして頗る傲慢なる暴君なり屢皇后を更む爲に法王と争常に絶えず新舊兩教徒共に虐待に苦めり然れども租税を軽くし且つ政治少しも滯滞なかりしを以て一般の人民は増富榮に赴けり

問題第二

エリサベスが新教を國教となしたること及び英西大戦争を問



日耳曼帝國は新教徒に宗教上の自由を興へたるも國內の分裂は愈よ甚しく且つ常に戰場の中心たりしを以て全國到る所兵馬の蹂躪する所となり民力靡弊し文明衰退し其後二百余年間は此損害を償ふこと能はざりき之に反して佛蘭西、瑞典兩國は各其領地を廣め瑞西、和蘭兩國は此時より獨立することなれり

問題第十一

佛蘭西にてはヨシカールツインなるもの宗教改革を主張しルーテルよりは一層新奇なる説を唱へたり是れより内亂常に絶えずチャールス九

世位に上り暗弱なりしを以て實權は全く太后カザリン及び弟ヘンリーの手に落ちたり王之を不満とし竊に新教の諸侯に謀り彼等を退け自ら政權を握らんと欲す太后之を聞き其徒黨と謀り紀元千五百七十二年八月二十三日の夜不意に巴里に在る新教徒の家を襲ひて一萬餘人を殺せり

り之をセントバーソロミューの虐殺と稱す此虐殺は尋で全國に廣がり新教徒の之に死するもの四萬餘人の多きに及び是より國中益亂れ戰爭絶えざること十八年ブルボン家のヘンリー四世位に即くに及び宗教の自由を許し内亂始めて一定せり王賢明にして租税を軽くし農工の衰頹を挽回せり

第四章 英吉利史

問題第一

ヘンリー八世の私徳と公德とを問ふ

ヘンリー八世はヘンリー七世の子にして頗る傲慢なる暴君なり屢皇后を更む爲に法王と爭常に絶えず新舊兩教徒共に虐待に苦めり然れども租税を軽くし且つ政治少しも滯滞なかりしを以て一般の人民は増富榮に赴けり

問題第二

エリサベスが新教を國教となしたること及び英西大戦争を問



ふ

ヘンリー八世死し十一年を経て皇女エリサベス即位し新教を以て國教とし自ら宗教上の主權を握り舊教徒を壓服せり是に於て他の舊教諸國百餘艘の軍艦を送り英國に向はしむ（此艦隊を稱してインビンシブルアルマダと云ふ）其狀恰も彼のダライアスが艦艘連續希臘に攻め入りたるが如く一撃の下に英國を屈服せしめんと思ひたるに何ぞ圖らん却て其破る所となり艦隊半ば毀たれ半ば風波の爲に覆へされ逃れ歸りしものは僅に其三分の一に過ぎず是に於て歐洲大陸の新教徒も大に勢力を得西班牙の權力頓に衰へたり

**問題第三** エリサベス時代英國の隆盛なりし概況を記せよ

西班牙の軍艦破れ歸りし後英國は威を海上に振ひ到る處に殖民地を設

け通商益盛大なり又國內にては工業製造隆盛を致したるのみならず文學大に起りシエクースピアの如き古今獨立の著作家出でたり實にエリサベスの世は波斯戰爭後に於けるペリクルスの時代と一般文運武力共隆盛の極に達し英人が常に誇稱して止まざる處なり女王は其性質欠点なきに非ざれども亦其目的とする處は英國の名譽を揚げ富強を致すに在りしなり女皇紀元千六百三年に死しチユードル王統是に於て絶ゆ

**問題第四** セームス一世及びチャールス一世ノ逆政を問ふ

エリサベス死しセームス一世即位す是れより六代の間王位はステュワート家にあり當時英國にて商工業盛なるに隨ひ中等社會の權力次第に増加し自由を尊重するの念漸く深かりしにも關せずセームス一世は飽まで王權を張り專權を行はんとしたるを以て人民の不平止む時なく其子チャールス一世位を繼ぐに及び神權説を信じ國會の承諾を待すして



租税を課し縦に臣民を禁錮する等壓制の處置頗る多かりき  
百二十八

問題第五 權利請願を問ふ

チャールズ一世即位の初め西班牙及び佛蘭西と戦端を開かんとして軍費を國會に要求したれども國會は王の専制と其顧問バキンガム公の擅横を惡み且つ政治上の弊害を匡正せんことに心を用ひて外戦を願ふに違あらず爲に王に供給したる軍費は王の意を滿すに足らざりき爲に王大に怒りて國會を解散し遂に不法の租税を課するに至れり於是乎紀元千六百廿八年に集會したる國會は人民の財産上身体上の權利自由を議決し王の證認を請ひ而して王も亦止むを得ずして之に證認を與へたり之れ有名なる權利請願なり

問題第六 長久國會とは如何

蘇蘭士人チャールズの壓制に抗し宗教の自由を唱へ兵を擧ぐ王追討の

師を起さんとしたるも今や又軍費の支へなし於是乎止むを得ず十一年間の専制の後紀元千六百四十年四月國會を召集したれども王は此國會の舉動に満足せず忽ち之を解散し同年十一月再び新國會を召集せり之れ有名なる長久國會なり此國會は自ら承諾するに非らざれば縦令ひ王命を以てするとも解散せずと議決し人民の權利自由と國王の正當なる權利を確定し又ストラフオールド侯及びロードを彈劾し之を處刑せり王乃ち人を國會に遣しヒム、ハムプデン以下五人の首領を捕縛せんとしたれども目的を達せず結局兵力を以て之に迫らんとするに至れり

問題第七 英王英民の戦争及びチャールズ王を死刑に處したる事を記せよ

王室と人民との不和は日を追ふて増進し紀元千六百四十二年には遂に分裂して大亂を起すに至れり此時貴族僧侶は大抵王に従ひ農夫商人等



は國會黨に與して干戈を動かすこと六年の久しきに及びり國會黨中第一の人物はオリヴァークロンウエルにして熱心なる清教派の一人なり性剛毅にして物に屈することなく且つ武に長じ向ふ所敵なくナスセーの戰にて王黨悉く敗れチャールスは逃れて蘇國に赴きしも直に國會黨に引渡さる是に於てクロンウエルは委員を撰び王を裁判し紀元千六百四十九年王を死刑に處せり

問題第八 共和政府クロンウエルを問ふ

紀元千六百四十九年チャールス一世刑せられて以來英國にては一旦王政斷絶し共和政治之に代り其政府をコムモンウエルスと稱せり而して表面上より見れば英國を支配するものは國會に外ならずと雖ども然れども實際政權を掌握せる者はクロンウエルなりクロンウエルは或は國會を解散し或は之を召集し百事意の如くあらざるはなく國會は又保國官

なる稱號を之に與へ萬般の政權を委託したり故にクロンウエルは實際專制君主に異る所なし而して武斷政略を以て國中に臨みたれど其在世中英國は國運隆盛に威力燦然として大陸諸國の上を輝きたり去れど晩年には國民漸く武斷政略に服せず王黨共和黨及び新教徒も往々反を圖る者ありクロンウエルは居常心安からず暗殺の禍あらんことを恐れ平時甲冑を着け毎夜寢室を替ふるに至る紀元千六百五十八年六十にて卒す

問題第九 王政復古を問ふ

クロンウエル 死後其子リチャード位を繼ぎしも不肖にして天下統御の才器なく僅か五ヶ月にして退職し國內再び擾亂す是に於て千六百六十年國民は遂にチャールスの子逃れて佛國に在る者を迎へて王位に即かしひ之をチャールス二世と稱す是に於てか王政復古するに至れり



**問題第十** 王政復古後に於けるチャールズ二世及びジェームズ二世の政事を問ふ

チャールズ二世は他のスチュワード王の如く人民を壓制すること無しと雖ども懶惰淫逸の君なりしを以て大に内外の嘲笑を招きたりジェームズ二世繼ぎて位に即くに及びては舊教を以て國教となさんと欲したるより人民等は王に反し千六百八十八年ジェームズの女婿オレンヂ侯ウィリアム三世を招き王に位に即かしむジェームズ二世は佛國に出奔せり

**問題第十一** 名譽革命とは如何

千六百八十八年ウィリアム英民に迎へられて和蘭國より大兵を率ゐて英國に入りジェームズ二世出發す貴族高僧等相會して假政府を組織し人民の代議士を召集して舊教を奉ずるの君主を戴くの不可なるを議決しウィリアム及びメレーに王位を授けたり此革命を稱して名譽革命とい

ふメレーはジェームズ二世の女にして曩にウィリアムに嫁したる者なり

**問題第十二** ウィリアムの治績及び權利法典を問ふ

ウィリアム三世は在位十有餘年外は佛國の強大に拮抗し内は憲法を制定して國家の鞏固を謀れり宗教の制を定め出版の自由を許し國民の輿望に依りて十三ヶ條の法令を定め王權の制限を設け上下に自由の權を附與し國會に重きを置く等苟も後世立憲王國の模範として世界の諸國が例を英國に取る所以の者は概ね此時代に發達せざるはなし之を權利法典といふ英國に於ける社會民權の發達と政事の進歩とは實に一千六百八十八年の革命とウィリアム三世の治績に基く者なり

### 第五章 佛蘭西史

**問題第一** 佛國の強盛リセリユの略傳を問ふ

紀元千六百十年ヘンリー四世死しルイ十三世即位す太后政を攝し政治



大に亂る此に於てリセリニー入りて相となり紀綱を正し貴族の權を削り且つ新教徒の亂を鎮壓せり又三十年戰爭に干涉して奧太利王家を屈服せしめ佛國の威名を四方に輝かせりリセリニーは權謀に富み英效果斷の大政治家にして國家を左右すること二十年の久しきに及べり

**問題第二** ルイ十四世の君主權擴張及び之が佛國に如何なる影響を及ばせしか

紀元一千六百六十一年宰相マザリン死してルイ十四世親ら政を執るに至れり時に王は二十三歳の壯齡なりき然れども王は既に專制主權の計を胸中に畫算せる故リセリニーの策を蹈み在位十五年依然として其方々の方畫にて佛國の強大を來したり

**問題第三** ルイ十四世が西班牙王の繼承に關係して大戰爭となりし顛末

所謂三重合従を問ふ

ルイ十四世は西班牙王フィリップ四世の女コリアテレサを容れて妃とせしが初めより此婚儀が何等の權利を生ぜざることとを約せり然れどもルイは西班牙王フランドルスに意ありし故紀元千六百六十五年フィリップは及び其妃の爲めにフランドルスを待んことを求めり西王聽か殘するに及び兵を發してフランドルスを襲ふ英國、和蘭、瑞典の三國佛國サルイ乃ち兵を發してサルイに抗せり三重合従是れなりルイ止むを得ずの勢力を恐れ同盟してルイに抗せり三重合従是れなりルイ止むを得ず

エトラシヤベルの地に媾和せり

問題第四 和蘭との戰爭を記せ

ルイ十四世は深く和蘭の抵抗を憤り英瑞二國に説きて同盟し紀元千六百七十二年兵を以て和蘭に侵入す和蘭のオレンジャ公ウイリアム之を迎へ奮戦皆利なく其國運殆んど危し既にして英國、和蘭と和し西班牙、日



耳曼亦之を援け佛國に當りしかば佛國は今四方に敵を受けたれどもルイは屈せず戦争結で解けざる數年交々勝敗あり兩軍遂に戰に倦み千六百七十八年にメーケンに和親の條約を結べり

問題第五

英佛戦争即ち大合従を問ふ

ルイ十四世の權勢は極點に達し殆んど全歐に透徹したれば各國頗る之を恐れたり和蘭のウイリアムはルイの仇敵なり英國の廢王セームスに次で英王となるやルイはウイリアムを英王と認むるを肯せずして廢王セームスを王位に復し以てウイリアムを英國より放逐せんとし屢英國の海邊を窺へりウイリアム乃ち西班牙、瑞典、日耳曼及び和蘭と同盟してルイに當る所謂大合従是れなり爾來各地に戰ふこと八年和蘭は戰場の中心たり遂に紀元千六百九十七年ライスウィックに條約を結び佛王はウイリアムを英國に公認することとなり各國和親成れり

問題第六

西班牙承繼の戰を問ふ

千七百年西班牙王チアールス二世歿して男子なくルイ十四世の孫フィリップはチアールスの遺志を以て繼嗣となる列國は皆以爲らくフィリップ年尙小なるを以て西國の王位を得る時はルイ十四世が西班牙王となりたるも同様なれば列國の權力の平均が之より偏重せんと依つて日耳曼英、普、和蘭等聯合して日耳曼帝レオホルドの子大公チアールスを西班牙國王となさんことを主張し之がため日英等の四國と佛國との間に戦争起り爾來十三年の間戦争絶えず佛軍は敗れたり然るに此際に當つて日耳曼帝崩じ大公チアールス之を受けしを以て諸國は大公をして西の兩國に君臨せしめんよりは寧ろルイ十四世の孫フィリップを推すの得策なるを知り千七百十三年ウートレヒトに於て條約を結びフィリップ西國に君臨するに至れり之を西班牙承系の戰といふ



**問題第七** ルイ十四世の孫フィリップ及び日耳曼帝レオホルトの子大公チャールスが各西班牙承系の権利ある所以を問ふ  
 フィリップはチャールス二世の妹の孫に當り大公チャールスはチャールス二世の妹がレオホルトに嫁して生みたる子なれば此二子共に西班牙王の後嗣たるの権利を有せり

**問題第八** 新教徒の撲滅及び其影響を問ふ

ルイ十四世は元來舊教を好みたれど曾て法皇が國外に干渉するを許さず殊に新教徒は往々王の専制に抗せしを以て王は悉く之を撲滅せんとし紀元千六百八十五年にはナントの敕語を取消し次で又新教徒を舊教に改宗せしめんが爲め人民が外國に移住するを禁じたり左れど新教徒は尙ほ海外に逃亡し其數僅々の數月間に百萬人に達し而して此逃亡者は多くは商工業者にして各巨多の財産を携帶せし故に當時佛國の損害

は甚だ莫大なりと云ふ

## 第六章 日耳曼史

**問題第一** 西班牙王チャールス一世がチャールス五世の名義を以て日耳曼皇帝の位に即さしは如何

日耳曼皇帝マキシミアン一世は即ち奥太利家にして其子奥太利公フィリップ 西班牙領内なるチーザアランド王位にありてイサベラ女王の女マリアナと婚したるを以てフェルナント及びイサベラの繼嗣として西班牙の大國を受け之を其子チャールス一世に傳へたり此チャールス一世より實に日耳曼皇帝のマキシミアン繼嗣となる順序とはなりたるなり

**問題第二** チャールスは何故に直に日耳曼皇帝となる能はざりしか英佛は何故にチャールスの即位を妨げしか且つ帝位競争の狀を問ふ



日耳曼は元來撰擧王國なれば假令マキシミアン帝の繼嗣と雖ども一旦は是非とも撰擧の手續を経ざるべからず加之チアールスは既に西班牙王として廣大なる領地を有して歐洲中其勢力の右に出づる者さへなきに今又日耳曼皇帝の位を得ば最大權力を全歐に逞うすることは難からず是を以て佛王フランス一世英王ヘンリー八世は各自ら日耳曼皇帝となりてチアールスの勢力を妨害せんと欲し各候補者として帝位を競争せしが千五百十九年フランスクフォルドに開きたる撰擧會には各撰擧侯等もチアールスの最大權力を得るは自己の不利となるを知りてチアールスをば撰擧せずしてサキソニー公を撰擧したり

**問題第三** サキソニー公の讓位及びチアールス五世の即位を問ふ  
 サキソニー公は日耳曼皇帝に撰擧されたるも自ら其任に堪はずとて却つてチアールスを撰擧會に推したるを以て英佛の故障ありたるにも拘

らずチアールス五世日耳曼皇帝の位に即くに至れり

**問題第四** 日佛の戦争及びクレスビーの條約を問ふ  
 佛王フランス一世は日耳曼皇帝位の競争に失敗し且つチアールス五世が歐洲に最大權力を振ひ帝威赫々たるを見て不平に堪はず機を見てチアールスを挫かんと欲しチアールスも亦私に之に備へたりしが戦端は遂に開かれ千五百廿五年より同四十四年まで前後四回伊太利は毎に戰場の中心となりたり此二十年の繼續戦争中日耳曼國は多く勝利を得たれども土耳其の侵入及び宗教改革黨の擾亂のために全力を奮うてフランスに當ること能はず四回の條約毎に已が不利となり千五百四十四年クレスビーの條約にて兩國の高藤は一旦其局を結びたり

**問題第五** 土人侵入及び其終結を問ふ  
 日佛戦争の際に乗じて土人侵入は日耳曼の背後に回りて之を襲ひ其勢



甚だ猖獗たり然るにチャールスは日佛の戦争中なりしにも拘らず之を撃退して土耳其の野心を達する能はざらしめたり

問題第六

チャールス五世の人となり及び其退隱を問ふ

チャールス五世は内諸侯及び宗教改革の反亂と外佛國并に土國の侵入に堪ゆる能はず紀元千五百五十六年位を辞し寺院に退隱せり帝は性沈黙にして言笑すること少なくヘンリー八世其他當時の帝王の如く不徳の君にあらざりしも時勢を洞察するの明なく飽まで舊制度を守り新思想を壓伏せんとしたるは抑も亦過てりと云ふべし帝位を辞するに及び

西班牙日耳曼は再び分れて二國となれり

第七章

西班牙史

問題第一

西班牙の隆盛及びチャールス五世の略傳其版圖の廣大なりしを問ふ

西班牙は航海發見の隆盛を極めたる以來國勢頓に一變して歐洲に重きを爲すに至りチャールス五世が西班牙王たるの身を以て撰ばれて獨乙皇帝の位を兼ねるに至るや西班牙の強大なるに至りしこと實に驚くに堪へたり其領土は近く歐洲の南北に跨り遠く東西兩洋に及び紀元千五百五十六年チャールス五世病を以て職を辞し弟フェルナンドに獨帝の位を譲り子フィリップ二世に西班牙王國を繼がしめたる當時の西班牙王國は實に西班牙本土チデルランド、ナポリ、シチリア、ミラノ米國の一部及び東洋のフィリピン群島を包含せる一大王國たりき

問題第二

西班牙の衰退及び和蘭の獨立を問ふ  
フィリップ二世の時新教國內に蔓延せり王は頑固なる舊教信者にして新教徒を虐待し且つ諸外國の新教徒をも撲滅せんと欲して英國と戦ひ海戰に於て大敗して兵力を回復するの見込なきのみならず壓制の結果和



蘭は獨立するに至れり

### 第八章 和蘭史

#### 問題第一

和蘭人の特性及び其富榮を問ふ

チーザーランドは久しくチャールス五世の支配の下に在りしが紀元千

五百五十六年チャールス位を辞するに及び西班牙王フィリップ二世の支配に歸したり當時和蘭國民は航海商業を勉め製造に巧にして富榮他に冠たり

#### 問題第二

和蘭の獨立及び其勃興を問ふ

和蘭人は自由を愛し熱心なる新教徒なりしを以てフィリップ二世之を惡

み宗教裁判所を設け新教徒を嚴刑に處せり是に於て忽ち兩國間の戦となりオレンジ侯ウヰルヤム父子相繼ぎて和蘭人を率ゐ敵の大軍に抗し百敗撓ますフィリップ遂に力屈して紀元千六百九年休戦の約を結べり和

蘭人は之より先に共和政府を立てウィルヤム父子相繼いで大統領に撰ばれたり此戦争中は人民は尙ほ商業を怠らず一層國富を増し海軍の如きは當時歐洲中之が上に出づる者なかりき

### 第九章 普魯西史

#### 問題第一

普魯西の起原を問ふ

古昔日耳曼の小諸侯にホーヘンツレルンなる一家ありヌレンブルグの地を領せり紀元千四百十五年の頃此家系にフレデリックなる者なりブランデンブルグ選舉侯國の繼嗣絶ゆし時日耳曼皇帝シギスモンドより此選舉侯國を襲ふことを許されたり而して紀元千七百年の初西班牙承系の戦争起りしときホーヘンツレルン家は皇帝レヲポルド一世を援けし功にて普魯西の王稱を允許せり

#### 問題第二

普魯西の勃興を記せよ



紀元千七百一年フレデリック一世初て普魯西の王位よ上る王は頗る武事に熱心にして軍用なれば敢て國費を厭はず好で外國の逃亡者を迎へ之を厚遇して兵伍に加へ又大金を抛て驅幹長大なる者を外國に募集せり而して王が斯くして編制したる隊伍は其子二世の時代に實力を現はし普國の兵勢をして大陸に振はしめたり

問題第三

フレデリック王及び其治世并に普國の強盛を記せよ

紀元千七百十四年フレデリック二世即位す王は即位以前文事のみならず武事に注意せざりしが即位以後は性行一變し汲々として兵事のみを事としたり稟資剛毅難に當て屈せず奧國承系の戦争及び七年戦争にては其英名を全歐に轟かしたり故に世人之を大王と號せり大王は大に殖産を奨勵し商業を進捗し或は貧民を賑恤し大に王家の富榮を致せしが從來微々たりし普魯西も王の時代よりして歐洲五大國の一に加へらる

ゝに至れり

問題第四 七年戦争を記せよ

マリアテレサはシレシアを恢復せんと欲し魯國佛國瑞典及び日耳曼の諸州と連合したれば茲に普墺間に再び戦端破裂したり此戦争は紀元千七百五十六年より同六十二年迄續きし故七年戦争と稱するなり戦争中フレデリックは四方に大敵を受けしも屈せず能く兵を用ひたれども寡敵せず且つ戦争永きに亘りし故フレデリックの力も今は殆ど盡きしが此際英國普魯西を助け之に軍費を給したる故フレデリック大に勢力を恢復せり既にしてヒートル帝新に魯國に登祚し亦普魯西を助けしかばフレデリックの勢力益加はり遂に紀元千七百六十三年諸國平和の條約を結ぶに及で普魯西はシレシアを所有する權利を確めたり普魯西の勢力茲に至て愈盛なり



問題第五

ライオン同盟及び日耳曼帝の廢絶を問ふ

フレデリック二世紀元千七百八十六年に歿し從弟フレデリックウイリアム二世即位す此時代に當り佛國大革命あり普墺兩國は屢兵を佛國に出したれども志を得ず而てナポレオンが戰を歐洲に布告するに及び墺太利は佛軍に蹂躪せられ普魯西も亦其兵威に避易して爲す所なしナポレオン即日耳曼の多分を降服しバトリヤ、ウルテンブルグ等西南に在る日耳曼の諸州を連合してライオン同盟を作り其の盟主となれり時に紀元千八百六年なり此に至て日耳曼帝フランシス二世は帝位を辞せざる可からざるに至り其の代り墺太利を帝國と稱し其位に上りフランシス一世と稱せり日耳曼帝位を奉ずると殆ど一千余年こゝに至りて廢せらる

第十章 魯西亞史

問題第一 魯國の起原を問ふ

魯西亞はスラボニア人の占領せし地にて第九世紀頃那威人ルーリッヅ茲に王國の基を啓きたり此國土は夙ふ文明の萌芽を露はしたれども其地亞細亞に接せる故蒙古人の爲め國內を蹂躪せられ其羈絆を受け久しく歐洲の諸文明國と何等の關係を有せず第十五世紀に至り初めて蒙古より獨立し而して第十六世紀に至りアイハンなる者魯國皇帝の稱號を犯したり以來は國勢漸く隆盛に赴きしと雖ども尙ほヒートル大帝の時迄は歐洲の歴史に必要な地位を有せざりしなり

問題第二 ヒーターア帝の雄圖を記せよ

紀元千六百八十一年ヒートル一世即位す世人の大帝と呼ぶ者是れなり夙に國內の制度を改良し文運を啓發せんと企圖し先づ海港を得るの必要を知り兵を出だし黒海の海岸なるアツフ港を土耳其より奪略せり大帝は更に歐洲諸國の文運を觀察せん爲め紀元千六百九十七年外行を企



て先づ和蘭のアムステルダムに至り一職工と爲りて日々造船所に入  
し造船其他の技術を習得し次で英國に之を熱心に海軍に關する事業を  
視察したりしが千八百年の初め本國に歸るや大に國內の制度文物を改  
良し又政治宗教及び教育等を改革したり

問題第三

魯瑞の激戦及びチアールス十二世の末路を問ふ  
ヒートル大帝は又自國の勢力を列國間に振はんとし而して此目的を達

するには瑞典領なるバルチック 海近傍の土地を占領するの必要を知り  
紀元千七百年噠馬及び波蘭と連合して瑞典と戦争を開けり瑞典王チャ  
ールス十二世は時に年十八の少年なれども其性頗る勇猛なり直に兵を  
出し噠馬を蹂躪し露兵をナバルに破り更に波蘭に進入し其王ガスタビ  
ス二世を廢せり此際大帝は密に兵力を休養したりしが瑞典王が傲然大  
帝の和議に應ぜずして魯國に進入するに及び道路を破壊し土地を荒ら

し以て瑞典兵を苦めり時に天寒く瑞典兵凍死する者數を知らず大帝乃  
ち此機に乗じ瑞典を襲ふ會戰數次チャールス戰遂に利あらず土耳其に  
入る時に紀元一千七百九年なり

問題第四

ヒーター大帝の治世及び魯國の勃興を問ふ

大帝は在世の間大に國事に力め瑞典との戦の際も孜孜として内治の改  
良に従事せしが陸海軍は一新し法律制度は整頓し商工業は發達し其他  
學事より土木に至る迄大に改良せられたり且又瑞典との戦にては大に  
國境を擴張しチバ河畔の瑞典人を放逐して茲にセントヒートルスボル  
グ府を開きモスコウに代て首府とし又波斯亞と戦て裏海近傍の土地を  
得たり是に於て魯國の勢力俄然擴張し歐洲五強國中の一となれり紀元  
千七百廿五年大帝歿す

第十一章

佛蘭西大革命



問題第一

佛國大革命の原因を問ふ

百五十三

一千七百十五年ルイ十五世即位す時に五歳其在位六十九年間は實に此大革命の端を開きたる者なり蓋しルイ十四世が驕奢淫佚を極めルイ十六世が墮國と戦ひ七年戦争に手を出し國用爲に乏しく租税爲に重く國民は最も王を怨望せり加之其發行したる紙幣は忽ち信用を失ひ價格下落し上下殆ど破産の狀に陥りたり此際に當りルーソー及びヴォルテール過激の政事を唱へて人民を煽動し且つ佛國が米國の獨立を輔け米國は英國の羈絆を脱して共和政治を布きたるに感化せられ此等の事情により遂に一大革命の原因をなすに至れり嗚呼ルイ十五世が崩す際に朕が死後に大洪水ありとの遺言をなしたるは實に此變亂を看破したる者なり

問題第二 ルイ十六世が國會を徵集したる所以及び其結果は如何

佛國には千六百十四年以來專制政を施して國會を開くことなかりしが其後百七十余年の後即ちルイ十六世の時に至りて始めて國會を開きたり是れ實に財政を整理するが爲に増税を議する爲なりしも唯君主や貴族や平民との喧嘩口論のみにして止みたり

問題第三 國民會とは如何なる者なりや且つ其結果及び十六世の危難を問ふ

ルイ十六世が開きたる時の議員の數は千二百人の多きに達し平民其多數を占めたるを以て其威力貴族及び僧侶を壓服して三種族一院に會合せんとせり國民議會とは之をいふ王は怒つて之に停會を命じたるを以て平民等は他に會し過激の改革を企てしかば王は兵力を以て威嚇したるの結果巴里の府民は此處置に憤激し暴動をなし遂にバスチルの獄舎を襲ひ之を陥れ此以後暴徒は國內に蜂起したるを以て國會は此機に乗



して國王貴族及び僧侶の特權を全廢し政事及び宗教上の自由を許す等  
盡く制度を破壊せり且つウエルサイユの宮殿を襲撃して王を捕へて巴  
里に送り一の憲法を制定し國會を解散し新に立法議會を召集せり

**問題第四**

革命時代の三黨及び過激の暴擧を問ふ

此時に當りて佛國には立憲黨共和黨及び過激黨の三黨派あり過激黨は  
フアコピン會コルドリエル會より成立し急激の共和主義を唱へロベス  
ピアとダントンとマーラー之に屬し王を忌むこと蛇蝎の如く巴里の暴  
徒等と共に王室を襲ひ貴族廷臣を屠殺し又王を幽せり殊にロベスピ  
アの徒は殘酷なる手段を用ゐる王黨を捕へて獄に下し獄舎ために立錐の  
地なきに至れり

**問題第五**

ルイ十六世の死刑に處せられたる顛末を問ふ

一千七百九十年九月立法議會の期限盡く依つて新に國民會なる者を起

したり此時立憲黨は勢力已に衰へたるを以て其議員は皆共和黨過激黨  
より出し立君政体を廢して共和政を設立するを議決し共和黨の若實な  
る議を用ゐず議員の多數は國王が革命に抗し外國と結托し自國を攻め  
たる罪ありとし國會は之を死刑に處するの行を宣告しせり千七百九十  
三年一月ルイ十六世は斷頭機の露と消へたり

**問題第六**

戰慄時代を問ふ

ロベスピエール、マーラー等は過激の治安委員となり國政を掌り治安を  
保持するを名として王黨は勿論其他の者と雖ども委員の命に抗する者  
は盡く死刑に處し或は獄に下し刑に遇ふ者日々七八十人に下らず皇族  
貴族等は大概殺戮せらるる之を戰慄時代と稱せり既にしてアーラーは一  
女子に刺殺されダントンはロベスピエールに殺されたり國民會も漸くロ  
ベスピエールの專横を惡み兵を遣はし之を捕へ其連累と共に死刑に處し



たり戦慄時代こゝに至つて終る時に千七百九十四年なりき

問題第七 革命の終結及び革命黨の末路を問ふ

ロベスピエールが死刑に處せられて以後は國民等も革命の餘り急激なるを悔い過激も漸次其勢を喪ひ天下漸く亂に墜きたるを以て千七百九十五年に至り百名議會及び元老議會の二院を置き總督五名を立て、行政の長たらしむ佛國の革命もこゝに至りて一段落を結べり

問題第八 革命時代の外寇の勝敗及び其來寇の由來を問ふ

佛國の革命は寧ろ巴里府内の擾亂に過ぎずと雖ども米國獨立に引き續き此大革命を生じ王を刑するに至りたるを以て歐洲列國の帝王は大に之を恐れ兵を出して共和政府を倒さんとす是より戰爭は常に絶えず或はライン河畔に於てし或はチーザーランドに於てし或は伊太利に於てし佛人は驚くべき勇氣を以て常に勝利を得たり殊にナポレオン出づる

に及びて佛人は忽ち攻撃の位置に立ち歐洲全土を震慄せしむるに至れり

### 第十二章 米國獨立史

問題第一 西大陸に於ける歐洲各國の殖民したる最初の概況を記せよ

千四百九十二年コロシブスが亞米利加を發見したる以來歐洲諸國は爭うて土地を略し殖民をなし西班牙はメキシコ、ペリー、チリ及び南亞米利加の諸州を従へ葡萄牙はブラザルを取り佛國はカナダ地方を略し英人はバーシニアを始めとし今日合衆國の東部の沿海にある地方に殖民し西班牙人の如く土人を虐げ金銀を掠奪せず専ら開墾を事としたるを以て日を追ふて繁榮に赴けり西大陸發見の當初の状態は大畧如此なりき

問題第二 合衆國獨立の原因を問ふ



英國の殖民地は佛國の殖民地とは戦争常に絶えずカナダ地方は全く英國の手に歸するに至れり當時英國の殖民地は十三州より成り人口増加し繁榮に赴けり然るに英國政府は多年佛國との戦争等にて國用欠乏したるを以て殖民地をして軍費の幾分を償はしめんと欲し千七百六十五年印紙令を發布せり然るに殖民地の人民等は自ら代議士を出さるる國會に服従するの義務なしとて之に反抗せしを以て印紙税は實行する能はずりしも英政府は更に増税の手段を變じて茶及び其他の物品に課税し武力を以て之を實施せんとせり是に於てか米人大に怒り兵を擧げて英國に反す時に紀元千七百七十五年なり其翌年各州の代議士をフィラデルフィア府に會して獨立の布告をなせり此日を以て米國獨立の創建日となす

**問題第三** 米國獨立戦争の概略及米國建國の制度を記せよ

米國は獨立を議決せしより以來戦争は常に絶えず然るに獨立軍の大元帥和盛頓は高潔なる節操を有するが上に非常の勇氣と熟練とを以て英軍に當り軍器の不完全軍兵の不熟練なるにも拘らず屢々英軍を破る既にして佛國人ラファイエットも亦來りて米人を助け尋いでフランクリンバ里に赴き佛王に説き英國の戦端を開き且つ援兵を送らしむ千七百八十一年英將コロンウオリス降を請ひ越えて二年終に和議を結び英國の殖民の獨立を承認せり」是に於て十三州の代議士相集りて憲法を議決し合衆共和の制を建て和盛頓を撰擧して大統領とし獨立の目的終に其大功を奏したり

**問題第四** 米國の獨立は他の殖民地に如何なる影響を及ぼせしか

英國が合衆國の獨立を承認したるを以てメキシコ及びペリー并にチリとブラジル諸國も亦各兵を擧げ獨立するに至れり



**問題第五** 米國戦後の經營及び領土の擴張を記せよ  
和盛頓大統領となり多年戦亂の後民力凋弊し負債山の如くなりしかば

議院に謀りて外國輸入品に重税を課し以て國債を償却し銳意富國の道を講じ以て戦後の經營を完了し和盛頓の後も大統領皆其人を得て國家愈上隆盛に赴き又次第に土地を拓き州を併せて四十四州の多きに至れり。

**問題第六** 日米最初の國交を記せよ

紀元千八百五十三年大統領ピアスの時水師提督ペルリ日本帝國に來り我國と通商の約を結べり之を日本國交の最初となす

**第十三章**

**第十六世紀の文明**

**問題第一** 第十六世紀の文明の概略を記せよ

中古の終り頃よりして文明進歩の兆既に顯れたるが第十六世紀に至り

て其進歩益著しく或は航海通商の隆盛となり或は學問の再興新思想の發達となり社會百般の事物皆其面目を新にせり

**問題第二** 第十六世紀に於ける有名なる人物を擧げよ

第十六世紀の有名なる人物を擧ぐれば美術家中にはミケールアンゼロ、ラファエル、デューレル等あり著述家中にはセークスピア、モンサー、モンテーソン等あり理學者中にはマバーニカス、カリレオ等の大家ありたり

**第十四章**

**第十七世紀の文明**

**問題第一** 第十七世紀の文明の概略を記せよ

第十七世紀は無形的の文明即ち學問の進歩頗る著しくして諸大家を出だせりと雖ども然れども一般の人民は智識に乏しく生活の程度低く新聞紙の如きも未だ起らず且つ道路險惡にして頗る交通に不便なりしも



理學の進歩と共に有形の文明も漸次に進歩し萬事改良の緒に就けり

**問題第二** 第十七世紀に於ける有名なる人物を挙げよ

第十七世紀の有名なる人物を挙げれば哲學者にはベーコン、スピノザ、ライブニッツ、理學者にはチブレル、ニュートン、トリセリ、著述家にはラフォンテーヌ、パスカル、モークエー、ミルトン等の諸大家出でたり

### 第十五章 十八世紀の文明

**問題第一** 十八世紀の發明に係る文學を問ふ

植物學地質學も此時代に起り英國のアダム、スミス氏は經濟學の根本を創始し佛國のモンテスキューは近世政事學の基礎を立て惣べて科學の發明進歩を來し百科全書なる者は實に此世紀に見はれたり

**問題第二** 十八世紀に於ける技術の發明を問ふ

此世期に際してシェームス、ワット蒸氣力を使用することを發明しパークレーヴス及びアークライト氏は紡績機械を作り華氏列氏攝氏は寒暖計を發明しフランクリンは電氣を發明し流電氣の發明輕氣球の構造も此時に成り後世を益すること實に至大なり

**問題第三** 十八世紀の哲學及び文學を問ふ

此世期には哲學は進歩なざりしもカント及びロック并にヒューム、ヘンザム等の諸大家輩出し文學には日耳曼に於てシルレル、グーテ二人を得て文學大に振起せり

**問題第四** 十八世紀に於ける新思想及び政事宗教を問ふ

十八世紀は大變革の時代にして人民の思想著しく進歩し政事宗教皆之を道理に訴へ歴史的關係の如きは甚た之を排斥し耶蘇教の所謂道德智識を増進するといふに對しては駁撃を加ふること殊に甚しく爲に宗教



を革新し最も頑固なるゼイスト教は爲に解散せられたり、奥國は英國と共に佛國に迫りルイの血統をして再び佛帝たらしめんことを企てたり。ナポレオンは乃ち奥國に侵入し奥國を破り奥國は和を乞ふに至れり、幾くもなく英國も亦和せり。此時よりしてナポレオンの威望愈々高く國民は皆ナポレオンを敬慕せり。ナポレオンは又此機失すべからずとして力めて法律制度を改良し百般の事物を改革して大に國民の心を收攬し其結果議院は公布を發してナポレオンを皇帝に推選せり。ナポレオン一世是なり。此年を紀元千八百三年となす。

問題第五

佛國の隆盛即ちナポレオン在位の概況を問ふ

歐洲各國はナポレオンの帝位を退けんと欲し同盟して佛國に抗せり。佛國の海軍は英將テルソンのために破られたりと雖ども陸軍は至る所に敵なく各國共佛兵を恐るゝこと猛虎の如きに至れり。此時佛國領地は甚

だ廣大を極め北はデンマルク南はチーブルを以て境となしチーブル、スヘイン、スエーデン等には親戚及び其將校を以て君主となすに至れり。加之自ら來因盟及び瑞西盟の長となり列國の帝王は皆其下風に立ち其鼻息を窺ふに至れり。當時佛國の勢力は古今未曾有なりき。

問題第六

佛魯戰爭及びナポレオンの貶謫を問ふ

ナポレオンは破竹の勢を以て歐洲列國を凌駕したりと雖ども獨英國をば如何ともすべからず遂に歐洲大陸に命じて英國と貿易することを嚴禁せり。然るに翌年に至り魯國は此命に背きたるを以てナポレオンは魯國を侵撃せり。魯軍は謀つて佛兵をモスコウ府に誘ひ不意火を放ちたり。佛兵は糧食と居所とを失ひ止を得ずして兵を退けたれども大雪に遇し兵士の餓死凍死する者數を知らず。ナポレオン身を以て逃る列國は此機に乗して巴里に入りナポレオンをエルバ島に流しルイ十六世の弟ルイ



十八世を擁立せり

**問題第七** ナポレオンの復位及び其末路を記せよ

ナポレオンはエルバ嶋に在ること十ヶ月にして再び佛國に歸れり人民歡呼して之を迎へルイ十八世は再び他邦に逃れナポレオン復位せり歐洲列國は大に驚き急に佛國に進撃しウエルリントン、フリユッヘル英普の兵を率ゐてナポレオンとウラートルローに戦ひ大に之を敗る實に千八百十五年六月十八日なりき列國は再びルイ帝を立てナポレオンをシントヘレナ嶋に竄流す其後六年を経て病死す英雄の末路も亦憐むべきかな

**第十六章**

**英國史ハンノーバー王統**

**問題第一** ハノーバー王統の始祖を問ふ

英國は女王アンに至りてチーートル王統は絶えたり故に英國民はゼー

ムス一世の女エリサベスの孫あるハンノーバーの撰舉侯ジョージを迎へて國王となせり之をハンノーバー王統の始祖となすジョージ一世是なり時に年五十四王は學識乏しく且つ人君の器にあらず殊に英語にも通せずハンノーバー領に心を傾け英國には重きを置かさりし然れども此王の時代は先づ英國は無事なりき

**問題第二** ハノーバー王統治國中の大事件を問ふ

亞米利加の獨立戰爭民權即ち下院の勢力強大に赴きしこと改進黨保守兩黨の争盛なりし事等は其最も大なる者なり

**問題第三** ジョージ三世は如何なる君なりしや

ジョージ三世は品行方正天性純朴愛國の情殊に深く精を勵し治を圖りたる事などは英國の他王の及ぶ所にはあらずし英國民の深厚なる尊敬を受けたるも亦宜ならずや



問題第四

英國の東印度征服を問ふ

百六十八

當時東印度に於ては英佛兩國の殖民間に於て葛藤常に絶わざりしがクライブ、ヘスチング兩人前後勇を鼓して佛國の殖民に當り佛人を放逐し兼ねて印度土人を征服し印度の大部分をして英王の所領に歸せしめたり

問題第五

英相ピットの政事を問ふ

ジョージ三世の時に當りてピット宰相となるピットは賢宰相にして殊に時を察するの活眼を有せり内政の改正を企てたりしが時恰も佛國革命の亂起りたるを以て改革の却つて國家を危くせんことを恐れ忽ち政略を變じ歐洲各國と締盟して佛國の革命徒を撲滅して其王位恢復に盡力したり是れ英國に於て佛國革命の氣風が英國に薰灼せざりし所以なりピットの功も亦大なりといふべし

問題第六

ナポレオンが佛軍を破りしこと及びナポレオンが英國に對したる手段を問ふ

歐洲諸國が佛軍に破ふられ屈從したるに拘らず英國は飽まで佛國に反對したるを以てナポレオンは英國を攻めたりしも英國海軍の總督非常の老練と非常の勇氣とを以て佛軍をトラファカルに破りナポレオンの威力を挫折せしめたりナポレオンは英國に對しては非常に苦心したれども到底英國の海軍には勝つべきの成算なきを以て卑怯にも戦の手段に出でず歐洲大陸をして英國と貿易することを禁じ英國の商業を妨害したれども魯國の戦敗のために此目的も亦遂に水泡に歸したり

第十七章

和蘭及び波瀾史

問題第一

十七八世期頃の和蘭國の概況を記せよ

和蘭が西班牙より分立したるの後はオレンヂ公ウイリアム二世大統領



となり統領政事を行ひしが千六百五十年二世歿して以後二十年間共和政事となりウィリアム三世に至り統領政事に復し而して三世は實に英國王となり三世歿して後又共和政事となりしが千七百年代の終りに佛國に征服せられナポレオンの威族此國に君臨せり

**問題第二** 波瀾の國情及び其分割せられたる所以を問ふ  
波瀾は大凡三十万英方里を有せる大國にして其建國も早かりしが王權甚だ微弱にして貴族權甚だ強盛なり且つ此國は撰舉王國なるがために

王位相續の紛擾絶ゆることなく諸外國は之に關涉し魯埃普三國は種々の口實を設けて其國土を蠶食し千七百九十五年三國は其全部を分配し國家遂に滅亡せり

**問題第三** 波瀾人が佛國に組したる所以を問ふ  
魯埃普がナポレオンに反抗したるにも拘らず波瀾人が獨り佛國に與し

たる者は三國が嘗て三國を分配して掠奪したるを憤慨し屢々其國家を恢復せんと欲して成らざりしがナポレオン戦争の時此素志を貫かんがために佛國に同盟したるなり

**問題第四** ナポレオン失敗の後列國のウィнна會議及び其結果を問ふ

英露佛普埃等の列國は革命以來ナポレオンに攪亂せられたる國土を確定せんが爲に一千八百十四年ウィнна會議を開きたり其主なる事件は

(一)普國埃國の恢復したること  
(二)舊和蘭共和國埃領の一部の相合してチーザーランド王國を組織したること

(三)獨乙聯邦を創設したること

(四)西班牙サルマニアに於て舊王朝を恢復したること  
其他魯、英、スエーデン等も各多少の土地を得て以て最近世史の初舞臺



を開くに至れり

### 第四篇

#### 最近世史一千八百十五年以後

##### 第一章

#### 平和恢復後の歐洲各國

##### 問題第一

神聖同盟の精神及び其終局は如何

ウイenna會議の後一千八百十五年九月廿七日專制主義の首領者たる露帝は普墺兩國王と巴里に會し神聖同盟なる者を組織せり其名は宗教道徳を本として内外を整ふるに在りと雖も其實は君主專制主義の擴張に外ならず歐洲列國は大抵此同盟に加入したれども是れ實に徒勞に屬し國民革命の運動遂に之を挫折せしめたり當時此同盟に加らざりしは唯英國土耳其のみなりき

##### 第壹節

##### 問題第二

日耳曼聯邦及び聯邦中の大なる國々を列舉せよ

ウイenna會議巴里會議兩會議を経て日耳曼は聯邦組織となれり當時此聯邦に加入せし者は奧太利帝國普魯西帝國ハッリア王國等が其大なる者にして其他の王國大公國公國自由市府等を前の五國と合して三十九を而して墺國は實に之か盟主たりしなり

##### 問題第三

自由の發達及びフランスフォールドの國民會并に其結果を問ふ

元來聯邦の人民等は自由を愛し且つ日耳曼帝國を恢復して國威を振起せんと欲したりしも拘らず各州の政府は專制政治を舉行して其志を達せしめず折柄佛國には革命ありて君主を廢し共和政治となりたりしを以て國民等は之に激せられ一時蜂起し各州政府をして憲法を制定し國會を召集せしめたり其後千八百四十八年フランスフォールドに國民會を開きし時聯邦人民等は聯邦規約を廢し新憲法を制して日耳曼帝國



を恢復し普王を皇帝となさんとの輿論なりしが之を實行するの實力なきがために聯邦は千八百六十六年まで存立したり

**問題第四**

普墺戦争の原因墺國が聯邦より分離したる状を問ふ

聯邦中其國力の強大なるは墺普兩國なり此兩國互に權力を争ひ到底聯邦中に於て兩立する能はざるの情況を生じたり千八百六十三年此兩國は噠馬の二公領を助けて墺國より之を分離せしめしが此二公領の處分を議するに當り普國は己が領分となさんと主張し墺國は連邦に加へんと主張し互に兵力を以て相争ひしが墺國は失敗して和を普國に乞ひ其結果墺國は獨立して聯邦を脱し以て今日に及べり

**問題第五**

普國の聯邦に於けるの地位及び其他日日耳曼に君臨するに至りたる原因は如何

普國が聯邦加盟の當初は兵勢固より墺國には及ばざりしかど商業上の

智識に於ては優に墺國を凌ぐに堪わたり人民は國王の壓制に對しては固より不平はなきこと能はずと雖ども官吏其人を得て施政教育兩ながら其宜を得たるが爲に此間普國人民は歐洲中最も能く諸事整頓し最も能く幸福を享有し聯邦中他に比類なき愛國心を養成したり他日の勃興は實にこゝに基けり此戰より普國をして日耳曼に覇たるの實權を得せしめたり

**問題第六**

普佛戦争及び其原因結果を問ふ

佛帝ナポレオン三世は普國の勢力日に月に盛大に赴けるを嫉み何等かの口實の下に之を折伏せんと志し忽ち普王の親族レオポルトが西班牙王位に即かんとするに故障を入れたるの結果千八百七十年普佛兩國戰端を開きたり此時普國の宰相ビスマークあり將軍モルトゲの兩豪傑あるのみならず同盟諸州は勿論南部日耳曼諸州皆普國に加担したるを



以て戦は普國の大勝利に歸しセマンに於てナポレオン三世を擒にし進んで巴里を圍みアルサス及びローレン二地と償金五十億法を得て遂に和を結び普國をして歐洲に覇たらしめ五大國の一たらしめたり

問題第七 日耳曼帝國の再興を問ふ  
今や日耳曼諸州合一の時機到達し普國が佛國に勝を得るや諸州は普王

を日耳曼帝位に奉せんことを議し普王も亦之に同意し紀元千八百七十一年普王ウィリアム一世佛國ハルセーユの地に在て日耳曼帝位に上れり日耳曼茲に至て帝國となる同年三月帝國の國會初めて伯林に集會し國事を議し普王は代々常に日耳曼帝を兼ねることとし并せて帝國憲法を制定す

## 第二章 佛蘭西

問題第一 チャールルス十世及び七月の革命を問ふ

ナポレホン流竄の後はルイ十八世復位しルイ十八世の後は弟チャールルス十世即位せり此王は無謀にも専制政治を自由熱に狂したる佛國に恢復せんと欲し議院を解散し自由を束縛したりしかば千八百三十年七月巴里府民大に蜂起し王兵と戦ふこと三日王勝たずして出奔せり

問題第二 ルイフィリップの即位及び革命を問ふ

チャールルス十世出奔後ルイフィリップ、オルレヤン家を以て推されて王となれり此王は平和回復に盡力せしがと當時佛國に共和黨あり王權黨あり共和黨中にも温和黨あり急進黨あり王權黨にもオルレアン黨ありナポレオン黨ありブルボン黨あり佛國內は大擾亂の巻となれり王も亦自己の權を維持せんと欲して止むを得ず壓制を加へたるを以て巴里の府民は再び蜂起し王は英國に出奔し再び共和政治を施行せり之を千八百四十八年の革命といふ



問題第三

百七十九

佛國共和政の興廢及びナポレオン三世即位を問ふ

フィリップ王出奔の後は佛國は殆ど無政府の勢を呈し巴里の市上は常に流血の慘狀を以て満たされたり千八百四十八年十一月國民會は共和政府を復興しナポレオン(ナポレオン一世の姪)は任期を定めて大統領に撰ばれしが元來ナポレオンはナポレオン一世の業を回復するの野心ありしを以て遂に兵力を以て反對黨を獄に下し千八百五十二年に至り佛國皇帝の位に即きナポレオン三世と稱せり

問題第四

ナポレオンの叔姪二人のみ佛國皇帝の位を得たるのみなれば

二世なるを三世と稱する所以は何に基くか

ナポレオンポナハルトは二回即位の禮を行へり故に最初の即位よりエルバ嶋に流竄せられし時帝位を退けりエルバ嶋より再舉して佛國に入り再び皇帝の位に陞れり故に姪のナポレオンは二世にも拘らず三世と

稱したりき

問題第五

ナポレオン三世の外戦を問ふ

ナポレオン三世の在位中は實に外戦のみを以て滿されたり第一を佛魯戰となし(千八百五十四年)第二を佛・伊對奧の戰爭(同五十九年)第三は普佛戰爭となす第一は英國と合して魯國を破りたり第二は伊太利を援けて奧國と戦ひ之も亦勝利を得たれども第三普國との戦は大敗に歸し普の軍門に降るに至れり

問題第六

ナポレオン三世の内政を問ふ

ナポレオン三世は武斷政略を以て稍や專制政治を施し人民の自由は縮少したりと雖ども内政は大に治まり國力頗る盛に殖産・商業及び交通運輸の業に至るまで悉く擴張し外戦の續發したるにも拘らず佛國の富は空前の盛況を呈するに至れり



問題第七

共和政治の再興大統頭チエールの政事を問ふ

百八十

ナポレオン三世失敗後佛國は共和政治を復興しチエールを推撰して大統領となしたりチエールは大政事家にして施政其宜しきを得僅に數年の間に五十億法の償金を普國に支拂ひても尙は能く財政を整理せり巨額の償金を得戦勝國たるを得るも尙財政を紊亂したる日本の政事家は見て以て如何となすや

第三章 伊太利再興史

問題第一 奥伊第一の戦争及び其結果を問ふ

ウインナ會議各國領土確定の後伊太利國には數多の小國ありて其北部諸國は奥國に屬し其他は一の君主を戴けり此北部の國々は常に奥國の羈絆を脱せんことをこゝし他の列國も専制政事を廢して北部諸國に同盟し殊にサルマニア王アルベルトは自由主義を主張して人民を援け

以太利内の奥兵を退去せしめしが奥國は大舉して伊太利に侵入し其領土を回復したれども奥伊の敵意は此戦争一層の甚しきを加へたり

問題第二

奥伊第二戦争サルマニアの勃興伊國に於ける奥領獨立を問ふ

サルマニア王セクトル、エマヌエル二世はアルベルト王の子なりカプーラといふ賢宰相を得て國事を議し千八百五十九年伊太利半島に入り其人民を援け奥國と戦端を開き且ナポレオン三世の援兵を得て奥國を破り獨り伊太利北部を獨立せしめたるのみならず奥國よりロニハルマの地を得尋いで諸鄰國もサルマニア王の配下に歸する者三四ヶ國に達せり且つガリハルマといふ名將を得てシ、リ、及びチーブル王國并に法王領を服従して伊太利の大半を得るに至れり

問題第三

伊太利王國の再興及び法王權の衰退を問ふ

千八百六十一年伊國の國會は伊太利王國建立を議決しサルマニア王を

百八十一



奉して王となす伊國エマヌエルは奥普戦争の時普國を援けて領地を廣め久しく分立せる伊太利諸國はこゝに至りて一統し國王の威權は全伊に羅さ之より伊國は文武兩ながら進歩し歐洲五大國に一を増し終に六大國の一と稱せらるゝに至れりエマヌエル王の王權伸張は共に古來伊國に威權を弄したる法王も亦其配下に屬し僅に宗教上の權力を有するに止まれり

**問題第四** 伊國の宰相カプールの政略を問ふ

カプールは十九世期中の偉人なりサルヂニア王エマヌエルに相として夙に伊太利を一統し一躍して歐洲の強國に伍せんと欲し取らんと欲すれば先づ與ふの主義を執り英佛二國を助けて魯を討ち二國の歡心を得千八百五十六年諸國の條約會議に臨み奥國及び法王の不法に因り伊太利の靡弊を列擧して列國の保助を得たり伊國が強大なる奥國と戦ひて

大勝を得たるは佛國の援助を得たるなり實にカプールが外交政略其巧なるに基けり

**問題第五** 伊國の將軍ガリハルチーの軍略を問ふ

ガリハルチーも亦十九世期の偉人なり千八百六十年サルヂニア王の管軍なりと稱しシ、リー嶋に於て兵を擧ぐ嶋人多く之に歸し(シ、リー島は當時チーブル王の配下に屬せり)チーブル王も亦出奔せりガリハルチー終にシ、リーを服従してサルヂニア王を迎ふ伊太利の大半ガサルシニア王に屬したるは實にガリハルチーの力なり

**第四章 魯國最近世史**

**問題第一** アドリアノブルの條に於て魯國の得たる利益を問ふ

千八百二十一年希臘人は土耳其の壓制に苦み獨立せんと欲して兵を擧げたり此時魯國は土耳其侵略と己の同教徒なる希臘人を助くるの二目



的を以て英佛二國と共に希臘人を援けたり土耳其政府は之に抗するの力なくアドリアノブルに於て條約を締結し魯國は若干の土地と償金とを土耳其より取り希臘國を獨立せしめたり

**問題第二** クリミア戦争及び巴里條約を問ふ

アドリアノブル條約の後魯國は愈よ土耳其侵略の野心を長じ其手段として土國政府の支配を受く耶蘇教徒を保護するを口實として土耳其に進撃せり然るに英國及びナポレオン三世は其侵略を妨げんが爲に土耳其を援け英佛土の同盟軍を以て千八百五十四年クリミアより上陸しセバストポールの城壘を圍むこと一年餘遂に之を陥れたる此際に魯帝ニコラス歿してアレキサンドル一世即位し一年間戦争を繼續せしが兩軍も力屈し同五十六年三月巴里に於て條約をなし土耳其は依然獨立し魯國は多少土地を失ひ又魯國の軍艦が黒海に出入するを禁せられたり

### 第五章 英國最近史

**問題第一** 宗教法の廢止を問ふ

英國はエリサベス女王以來新教中の或一派を以て國教と定め此教徒にのみならざれば國會議員及び高等官に任ずる能はざるのみならず其他種々の權利を享有すること能はざりしがジョージ四世の時此禁令を廢し新舊兩徒共に同等の權利を享有するに至れり

**問題第二** 英國政府の英斷能く奴隸廢止の舉を決行したるを問ふ

奴隸廢止は千八百十五年ウインナ會議に於て議決せりと雖も各國共密賣の常に行はれたり殊に英國殖民地の如きは公然奴隸の賣買をなし來りしが奴隸廢止論は次第は其勢を強くし千八百三十三年國會は奴隸廢止の議を決し二千万磅の賠償を奴隸の所有主に與へ悉く英國管下の奴隸を解放したり



**問題第三** 奴隸の起原及び之を使役することの人道に背く行爲を問ふ  
 奴隸賣買は昔時亞弗利加に行はれ其後南北亞米利加發見以來歐洲人も盛に之を賣買して使役せり然るに世の進歩と共に人類賣買の人道に反るは勿論之を使役する行爲は全く牛馬同等なりしを以て其不當を論ずる者日に月に多さを加ふるに至れり

**問題第四** 穀法令の廢止及び自由貿易の發達を問ふ  
 昔時は保護貿易勢力を占め英國の如きも千八百十五年を以て穀令なる者を發布して輸入の穀物に重税を加へ内國の農家を保護したり當時コ

フデン及びブライトといふ清廉なるに政事家出でて非穀法同盟會を組織して穀法の弊害を唱へ自由貿易を主張したり既にして英國は飢饉に遭遇し外國穀物の高價なるに困窮したりしを以てブール内閣(ピクトリア女王の朝)穀法の不可なるを察し國會の協賛を経て穀法を廢止し

たり之より自由貿易論漸く勢力を得るに至れり

**第六章 希臘比耳時史**

**問題第一** 希臘國再興を問ふ

希臘が土耳其に併吞せられしより凡そ四百年常に虐待を受しかば希臘人は不平に堪はず千八百二十一年死力を出して獨立の戰爭を開始せり然るに土耳其人は元來慥悍なるが上に埃及人之を助けたるを以て希臘人は到底土耳其の虐政を免るゝ能はざりし勢なりしが英佛魯は之を憐み同盟軍を起して希臘人を助け千八百三十七年三國艦隊相合してナポリノ灣に於て土耳其の海軍を破り佛兵は埃及軍をマロポネザスより追ひ拂ひ希臘國を再興せり

**問題第二** 比耳時の獨立を問ふ

ウインナの列國會議の結果チーザーランドは南北兩部を合して和蘭國



を再興したるが兩部の間は常に政權の競争絶えず分立の到底免る能はざる形勢を呈せしが折しも千八百三十年佛國に革命起り大なる刺激を與へたる結果南部は遂に兵を擧げて和蘭に抗敵し終に獨立して比耳時國を組織し日耳曼の貴族レオポルトを推して國王となすに至れり

### 第七章 米國最近世史

#### 問題第一

奴隸廢止が何故に南北兩部の葛藤の原因をなせしや

米國の南部は氣候溫和地味膏腴なるを以て人民皆農を事とし多く奴隸を使役せり北部諸州は南部に反して寒冷にして且つ豐饒ならず製造貿易を事として奴隸を使役せず且つ貿易上に於ても南北其意見を異にし北部の人民は殊に奴隸を使役するの人道に悖戾するを主張せり南部の人民等は大に之を怒り竊に分立を企つるに至れり是れ實に南北葛藤の原因なりとす

#### 問題第二 南北兩部の分立及び其戦争并に其終局を問ふ

千八百六十年大統領選挙の際北部勝を得て奴隸廢止論の首領リンコン大統領となりしを以て南十一州は分立しメーサイスを大頭領となせり之より所謂南北戦争起り米人の戦死する者百數万互に勝敗ありしが最後ヒーマースブルクの一戦に北部の大將グラント南部の軍を敗り南部の將リーを降し南北再び平和に歸し奴隸を使役することを全廢せり

### 第八章 十九世紀の文明

#### 問題第一 十九世紀文明の總体につきて記せよ

十八世紀の末より學理進歩し來り此と同時に此れを應用することも亦巧となり以て我が十九世紀に至り物質的並に精神的文明非常に發達して社會を左右するに至れり

#### 問題第二 蒸船蒸車電信電話の發明を問ふ



紀元千八百〇六年英國の技師トリウイシック蒸氣機關車を發明し千八百〇九年獨乙人ゼムメリングは電信術を發明し千八百六十一年獨人フヒッパ、ライス電話法を發明したり蒸氣機關を航海に使用したるは十八世紀中にありしが此れを實用に供するを得たるは英國フルトン氏の力によれり

問題第三 十九世紀の科學を問ふ

科學に於ては獨乙のマイエル、ヘルムホルツの唱導せる勢力不滅論英國人ダーウキンの生物進化説等は未聞の新説を始めキルヒホン及びブレンセンの分光器構造並に其應用に成れるタルボット、ダゲル等の創めたる寫眞術は廣く影響を世界に及ぼしたり又佛國のラプラス及びブラグランは天文學に一新時期を與へ其他地質、化學、生物、物理、博物等の諸學科に於て著しく發達せり

問題第四 十九世紀の哲學史學に就きて記せよ

哲學に於てはヘーゲル、ロツチエ、フヒヒテ、シヨツペンハウエル、ハルトマン、マムト、スペンサーの輩相續て出で各哲學の一派を組織したり又哲學史家にはリツテル、エルドマン、チエレル、クノ、フヒシエル等の諸大家あり史學に於ては獨乙のランゲを始めドロイゼン、ワイベル、ゲルヴィヌス、モムゼン、ツンケル、ウエーベル、トライチケあり英國にはフロードフリーマン、ガデーナーあり佛國にはギヅー、テーン、シスモンヤあり皆名篇大作を後世に遺せり

問題第五 十九世紀の文學に就いて記せよ

獨乙の詩人ゲーテ並にシラーの兩人は十八世紀末葉のレスシングと共に獨乙の三大家と稱せられ今日獨乙文學の標準たり英國には詩家としてサウセイ、ウラルツウオース、ブラウニング、テニソン、スウヰン



百九十二  
バーン、アーノルドあり小説としてはチッケンス、サツカレイ、エリ  
オット、マクドナルドあり米國にはロングフェロー、エマルソンあり  
佛國には詩にユーエ、ベランセル、ラマルタン、ユスセーあり小説に  
はゾーマ、ツデワン等あり

# 新編世界歴史問答

終

明治三十四年四月廿二日印刷  
明治三十四年四月廿日發行

編纂者 精華堂編輯

發行者 又間安次郎

印刷者 菅田淳吉

不許複製

發賣元 又間精華堂

大阪市南區心齋橋筋安堂寺町西入